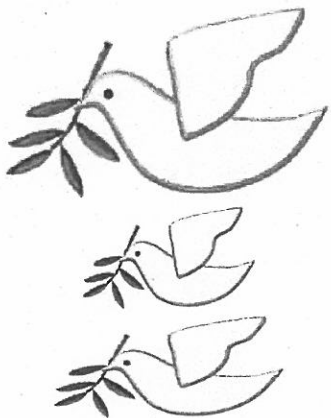




平和のために語り継ぐ

「私の戦争体験談」 ～総集編～



平和のために語り継ぐ「私の戦争体験談」 ～総集編～

本市では、このたび広報まるがめ、二〇一五年十一月号から二〇二〇年八月号に掲載された「私の戦争体験談」を、一つの冊子としてとりまとめ「平和のために語り継ぐ『私の戦争体験談』 ～総集編～」を作成しました。

戦争を知らない世代が多くなっている現代社会において、私たちは、二度と戦争を繰り返さないために、戦争体験を後世へ語り継いでいかなければなりません。

この冊子は、市民の方から寄せられた様々な戦争体験を通して、平和への思いが綴られたものとなっており、戦後七十五年が経過し、語り部も少なくなっている今となっては、戦争を後世に語り継ぐ貴重な資料となります。悲惨で悲しい体験が、戦争を絶対にしてはいけない、忘れてはいけない、という強い思いと、平和の大切さを今の私たちに教えてくれています。この冊子を通して、次世代を担う方々に少しでも戦争体験を知ってもらい、後世へと語り継いでいくために、平和への理解を深める一助としていただきたいと思います。

令和三年二月

丸亀市市長公室秘書政策課

目次

① 七十年前を思う ― 人前では泣けなかった ―	吉川 弘子	1
② 「戦争はすべてを無にする少年時代の戦争体験」	小林 文雄	3
③ 高松空襲 ― 七月四日 惨禍を語り平和を祈る ―	児玉 一枝	5
④ 十五歳の軍需工員	中田 卓子	7
⑤ 大阪大空襲 命からがら古里へ 平和がずっと続きますように	山本 弘子	9
⑥ 私の終戦70周年の思い出	須藤 宏三	11
⑦ キリキリと輝きだかった青春時代	吉川 和子	12
⑧ 戦時下・8年制国民学校 最後入学児童の戦後70年 軍港の町 呉	宮近 昭紀	13
⑨ 空襲下に生きる 学童と女教師	山本 治子	15
⑩ 昭和19年秋、19歳で「赤紙」 大陸での青春時代3年間	今田 武二良	17
⑪ 「呉」で機銃掃射を受け 同級生は「特攻隊」に散る	江戸 秀信	19
⑫ 地平線を見ながら過ごした少年の日	小佐古 公士	21
⑬ 土器国民学校での思い出	西池 一美	23
⑭ 特攻機は練習機「赤とんぼ」 いざ出撃の前日に終戦	田中 卓	25
⑮ 出征した父の思い出 ― もう戦争は嫌だ ―	宮田 文子	27

⑯ 戦傷病者として16回の手術に耐えて	岩崎 森男	29
⑰ 38歳で父は出征 戦死 かの太戦で 皆逝った	藤枝 美枝子	31
⑱ 五分間の決断 「特殊潜航艇『蛟龍612号艇』横井順一の手記」	横井 康代	33
⑲ 切なる願いは戦争のない平和な世界	菊地 数雄	35
⑳ 6歳だった幼児の戦争体験と伝えたいこと	宮近 昭紀	37
㉑ 大東亜戦争（太平洋戦争）と国民学校の生徒	草薺 正美	39

(敬称略)



戦後70年

永久平和を願って 次世代に戦争体験を語り継ぎたい

私の戦争体験談①

「あの頃はよく辛抱して、耐えてきたね」

と言つても、うなずいてくれる人はもう少ない。七十年も経つたのだから。

太平洋戦争が始まった時、私は岡田国民学校初等科三年東組であつた。十二月八日、職員朝礼から先生がなかなか帰つて来られない。私たちはワイワイ騒いでいたら、先生を見つけた男の子が「シート」と言う合図で静かになった。

教室に一步踏み入れた先生は、後ろ手を引き戸に掛けたままで、「よう聞きなさい。アメリカと戦争が始まった。日本が先に軍艦を攻撃した」

「うわあー、やったやった」

七十年前を思う ―人前で泣けなかった―

綾歌町 吉川 弘子さん

みんな大喜びした。それ程日本中に戦争の気運が盛り上がつていたのだ。しかし、この喜声は先生の暗い顔に、一瞬にして消えた。先生は片山先生といつて、師範

日本がハワイ真珠湾を奇襲(昭和16年12月8日)



太平洋戦争開戦を報じる当時の新聞



学校を卒業したばかりで若く、私たち皆が大好きだった。不意打ちを掛けたら戦況がよく、楽しい三年生を終了した。そ

の春休み中、他校へ変わる先生の離任式に登校した。すると、片山先生が緊張した様子で校長先生の横に並んだ。

「せんせ、どこの学校へ行くんやろか」

「ちやうわ、兵隊に行くんやわ」

元三年東組だけが騒然として、中組の怖い先生に睨まれた。校長先生は

「片山先生の出征は本校の名誉です。『片山先生万歳、万歳、万歳』」教室に帰つて、女子は皆机にうつ伏し、でも誰も泣き声は出さなかった。男子の憧れは兵隊だったから、あまり辛くはなかったのだろうか。私は誰もいない新校舎の裏へ行つて泣いた。

鐘が鳴つたので、掌で顔をなでなで教室へ走つていたら、中央廊下に片山先生がいて、手を振つてくれた。とても恥ずかしかった。

「出征兵を送る時や遺骨を迎える時は、泣いたらいかん。お国の為の立派なことだから」知らぬ間に植えつけられた鉄則であつた。

日中戦争が昭和十二年開戦だったから、私たちはすでに日の丸を握つて遺骨を送つたり、駅前に整列して遺骨を迎えたりしていた。黒い喪服に白木の箱を抱いて電

のだそうだ。

この爪はもう治らないけれど、若くして逝つた新太への償いだと思つてゐること。

「この話初めて聞いて貰つたわ、良かった」

車から降りて来るのは、奥さんや、白髪のお母さんであつたりした。電車から降りた途端、迎える人を見ても泣き声を呑み込み、深くうな垂れて歩いた。あんなむごいことつてある？

昭和十八年片山先生が戦死された。

近所の義晴さんは『七つボタンは桜に錨』海軍予科練のかつこい服に身を固めて、先頭をしつかり歩き、後は見送りの行列が長い。私の家は道路に近いが山裾なので、道路を行く行列を長く見渡すことが出来る。

ふと見ると大きい山桃の木の下に、義晴さんのお母さんが目立たないよう黒いエプロンをしてしゃがみ込んでいる。私が。

「おばさん、早う義晴さん送つて行かな」

「いいや、行つたら義晴も私も辛いみんな。ここから見送らして」

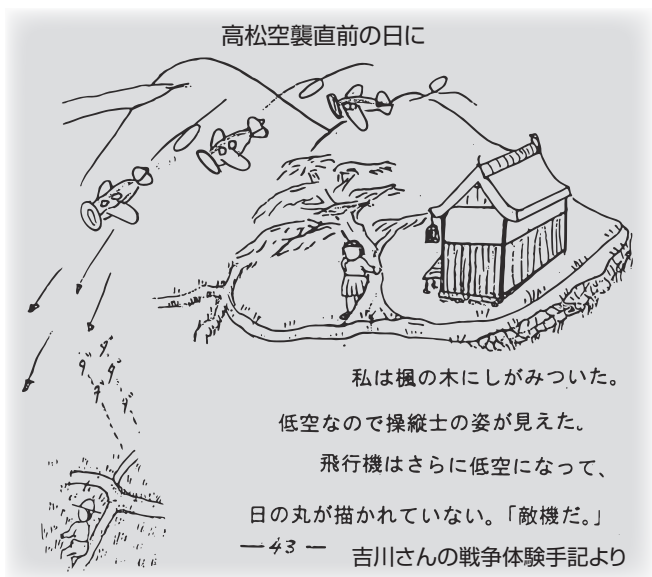
そう言つたおばさんは声を上げて泣き出した。涙が溢れるおばさんの目は、道路を行く義晴さんから離さなかった。

父方の叔母の家へ行くと、長男の新太さんの遺影が、仏壇の横に祖父母と並んで掲げられていた。

すつきりした叔母の表情だった。

今夜のお月さんは凡そ十五歳、すつきりした顔の筈だが雲が厚い。雲は仕方ないが、戦火の煙に曇らせないよう、心して守つていこう。

幼稚園などから、戦争体験の話の依頼があれば、家にあるハギシなどで作つて見せてもらっています。上から、防空頭巾、救急袋、わらぞつり。



滅多に行けなかった私だけど、その時はいつも叔母と一緒に、仏壇と遺影にお参りしていた。はたちの頃の私に叔母が話をしてくれた。

「子に先立たれるほど辛いことはないよ」と、まず前置きを。戦死の公報が来た時には、(公報が間違いだ)と自分に言い聞かせていたとのこと。

「公報から三月も経つて、骨になつて戻つて来た新太は『ただ今』

もなーんも言わへんがな、そこで初めて戦死を認めて辛かつたわ」

叔母の話はなお続いた。

「弘子さん、これ見て」

両手の爪を見せられた。よく覚えていないのだが、どの爪かは指の肉と離れて、縦割れしたまま伸びていたし、他の爪も黒か紫のままで痛ましい指であつた。

遺骨が帰宅した頃は、近所や親戚の人の出入りが多くて、人前で取り乱してはいけないと思つたから、裏の山へ行き松の木に向つて叩いたり引つ掻いたりして泣いた





戦後70年

私の戦争体験談②

永久平和を願って 次世代に戦争体験を語り継ぎたい

「戦争はすべてを無にする」

少年時代の戦争体験」

飯山町 小林 文雄さん

私は1935年（昭和10年12月）、飯山町東坂元（旧綾歌郡坂本村）で生まれ、今年80歳を迎えます。ときあたかも広報丸



大型爆撃機B29

亀8月号で、平和のために語り継ぐ「戦争体験記」募集を目にし、戦争は二度と繰り返してはならない強い思いから、私の少年時代の体験を記し、戦争を知らない若い世代の方々に一つでも知っていただき、平和の大切さを共に訴え続けて行きたいと思います。

今年は戦後70年、日本は、日本国憲法のもとで、国土再建、経済成長を成し遂げた。この間、戦争放棄を旗印とした民主平和国家であることを世界各国から認められ今日にいたっている。このところ、近隣国間の緊迫する諸情勢から、政府は新しく「安全保障関連法案」を国会に提出し、審議、賛否両論の激論中である。去る8月30日に

戦に至った。戦中、国民は現在の様に世界の情報を知り得るような報道やネットは無くまた許されなかった。

私たちは米、英国はどのような国であるか、教わることも無く、ただ敵国鬼畜米英と……一億一心（国家の団結）で必勝すること



戦争はすべてを無にする——原子爆弾——

を心に植え付けられた。日本は神国、天皇陛下は神様として崇め、「朕（天皇陛下）の命令は神の命令」だ……と教育された。軍隊では、上官の命令は「朕」の命令として絶対服従し、国家統治がはかられた。

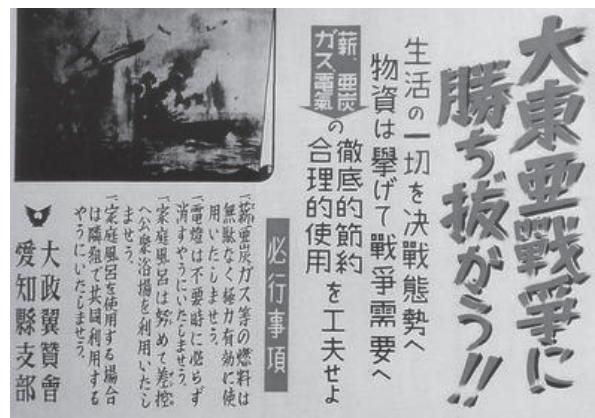
平和は人々の
心と力で生まれる。

戦争は人々の命を奪い、敵対する国を滅ぼすことで何一つ益することはない。現に地球上の各地で頻発している争いを、テレビ報道などで目にするが、科学兵器を駆使し全てを壊滅する様相は、想像を絶するもので

は、同法案に反対する国民運動が全国で起こされ、東京では国会議事堂を囲み、大規模なデモ行進が展開されるなど、将来の平和国日本の在り方に国民の関心が一層高まっている。昨今である。

高松空襲と避難訓練

1944～45年（昭和19～20年）の終戦に至るまで、東京空襲を始め次々と大都市が戦火で焼失した。1945年（昭和20年）7月4日には、高松が空襲を受け、1359人が、命を奪われ、8万6400人が被災した。その時の記憶は鮮明に残



生活のすべてが戦争一色

っている。

飯野山スレスレに西から、大型爆撃機B29が100機余り、もの凄いい爆音を残しながら高松に向かった。809トンもの焼夷弾の火の雨で東の空は真っ赤に染まり、城山の姿が浮き絵のようだった。田植を終えた水田には、防信用の鈴の長い長いテープが多く落とされていた。

当時は連日といっても過言ではない空襲警報が発令され、艦載機グラマンの飛来があった。また、1万メートル上空をB29が白い飛行雲を残しながら悠々と飛び去る状態に唖然として空を見上げるだけだった。

学校においては、校庭にツボ穴を掘って逃げ込む訓練や、校舎のなかでは、机の下に身を伏せて、両手を両目、両耳に押し当て身体の防護訓練に励んだ。校舎の窓ガラスは爆撃で飛び散らないよう新聞紙を細く切り張るなど防備していた。

洗脳教育の怖さ

世界には今でも、言論を封じ、自由を許さない独裁国が存在する。かつて日本でも、軍部主導となり、自由主義大国と戦い敗

ある。70年前、日本は広島、長崎に原爆を投下され、空襲により、東京をはじめ大都市は殆んど焼失した。同じく高松も戦火に遭い多くの人々の命を失い大なる被災を受けたことを後世に伝え継がなくてはならない。

今、日本国民は文化、芸術、スポーツなどを通して、よろこび楽しみ、文化生活を送れる幸せ、そして、平和の現実に共感を覚えます。

2020年（平成32年）は、平和の祭典「東京オリンピック・パラリンピック」が開催されるが、全世界の国々が参加され、平和のよろこびを味わいたい。戦後70年の節目として、恒久平



全国の主要都市が焼け野原に



永久平和を願って 次世代に戦争体験を語り継ぎたい

昭和二十年七月四日未明、米空軍B29の無差別爆撃によって、四国の玄関口高松は、市街地の大半が灰燼に帰した。今から七十年前の事である。

私は、その時、高松赤十字病院の看護看護婦養成所へ四月に入所したばかりであった。

当時高松赤十字病院は、呉海軍病院の分院として海軍の管理下にあり、海軍の傷病兵を収容すると共に、外来と一病棟のみに一般患者を収容し診療を行っていた。すでに戦局は悪化しており、病



母とつないでいた手が離ればなれに

院では空爆に曝された場合を想定して綿密な対策を立て、職員や看護婦一人ひとりにその方策を周知徹底し、訓練が行われていた。魔の七月四日、空襲警報発令と同時に始まった空爆は想像を絶するものであった。

その時私は、前日に亡くなった軍患者さんの通夜の当番で、宿舎から霊安室へと急いでいた。すると「その看護婦、早く防空壕へ入れ」と防空壕の上に仁王立ちの白衣の男性の声が出た。急ぎ宿舎の防空壕に飛び込むと、すでに数人が避難して居たが、私が入ると同時に宿舎に焼夷弾が命中したのであろうか、物凄い爆発音と共に火炎と熱風が、壕の内に舞い込んだ。すると再び「早く運動場へ逃げよ」との声、急ぎ壕を出てすでに炎に包まれていた病棟の廊下を駆け抜けて運動場へ。その時担架を担いだ二年生と遭遇、少しでも手助けに

高松空襲

―七月四日 惨禍を語り平和を祈る―

前塩屋町 児玉 一枝さん

なればと一緒に担ぎ、運動場を経て西門から空き地へ出た。避難指示をしてくれた白衣の男性が石井兵曹長であったと後で知った。その間もB29の空爆は衰えぬばかりか、連なって急降下しては焼夷弾を投下して行く。その数、実に百十六機の編隊であったと。

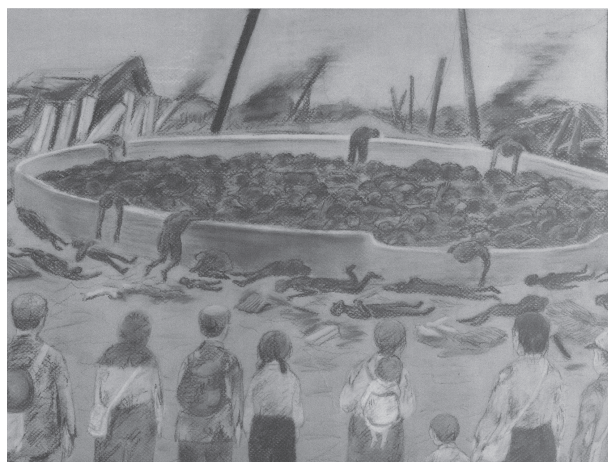
その都度三人で患者さんを庇いながら身を伏せていたが、弾にあたかも自分の頭や背中を狙い撃ちされている様な非常な恐怖であった。周囲の民家からも次々と火の手が上が

り、大きな爆発音と共にの高い建物の棟が落ちて、真昼の様に照らし出される。と、それを目標に又B29が急降下し、焼夷弾が投下される。その弾は自分達の周りにも落下し炸裂する。その様は正に生き地獄であった。

二時間近い長い空爆が終わり夜が明けてみると、当時四国最大の規模と設備を誇った四千四百坪の病舎は跡型も無く、鉄筋コンクリート建の研究棟一棟だけが外郭のみを残し、一万一千坪の敷地は、ただ黒々と瓦礫の山と化していた

の様な中、全員が一致し、分散避難していた患者さんを助け出し空き地に誘導した。幸いにも、一人の怪我人もなかったのは、平素の訓練の賜物であったのだろう。

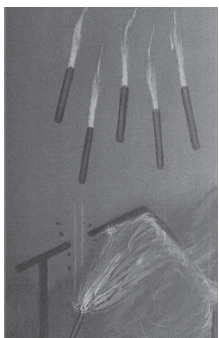
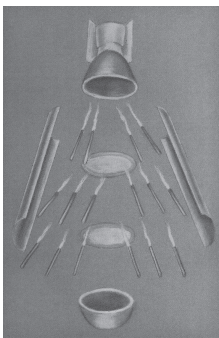
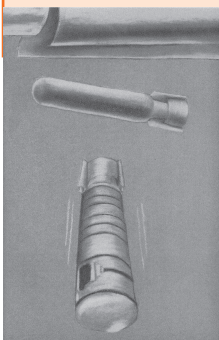
しかし、養成所一年の万代幸さんが肩に、後藤さんが膝に焼夷弾の直撃を受け負傷された。患者さんを身を以って守った為である。その後、石井兵曹長、山下婦長の指揮の下、順次隊列を整え昭和町の海軍人事部へ。そこで地域の婦人会の方々の炊き出しの「おにぎり」をいただき、再び炎天下を徒歩で鬼無駅まで担送護送した（高松駅は空爆で機能を失っていた）



中新町のロータリーの水槽は地獄絵に

B29(大型爆撃機)の焼夷弾

当時、木造家屋が多い日本の都市攻撃には「対象を燃やす」ことを目的とした焼夷弾が使われました。B29から焼夷剤を装填した子爆弾を収納しているカプセルのような爆弾が投下され、落下途中で分解して、中から多数の子爆弾が飛び出します。地面に激突すると、爆発して、燃えながら焼夷剤を四方に飛び散らす爆弾です。



鬼無からは汽車で琴平まで移動し、琴平では敷島館を本部に六か所の旅館に分宿避難した。私は敷島館でお世話になったが、その時の女将さんのお心のこもったおもてなしは、本当にありがたく思い出に残るものとなった。

その夜も何回となく警報が発令され、その都度山際まで避難したので、万代さん達が、担架のまま

た。

玄関で休んでいた痛々しい姿は、今なお心に焼き付いている。

そして、私達一年生は翌朝自宅待機を命ぜられて一時帰宅したが、その後被弾した万代さんはガス壊疽を併発し入院先の岩崎病院で亡くなられた。未だ数え年十五才（現在の中学三年生）の若さであった。軍では彼女の健気な活躍を称え、その死を悼み海軍葬を以って送ったが、余りにも悲しく痛

ましい限りであった。

この空襲で尊い命を落とされた方は、千三百五十九名にも上るといふ。心からご冥福をお祈り申し上げたい。

また、聖戦という名の下で戦った先の戦が如何に残酷悲惨であったか、その様は七十年を経た今も私の脳裏から消えることはない。そして、その惨禍を語り継ぐ事も、生き永らえた者の責務であろうと、その有様と思いを綴り、永久の平和を心から願い、祈り続けたいと切に思うのである。

（平成二十七年九月記）
絵…高松空襲を子どもたちに伝える会発行「えほん高松空襲」より

高松空襲を子どもたちに伝える会発行「えほん高松空襲」より



永久平和を願つて 次世代に戦争体験を語り継ぎたい

私の戦争体験談 ④

昭和十九年、大東亜戦争（太平洋戦争）も過酷さを増して来た頃、今こそ国のために奉じんと「女子年少工」に志願した。十五歳の春、香川県で二十名の選抜である私達は丸亀市で受験。合格後、広島県呉市にあった工廠（第十一海軍航空廠（以下空廠）



工廠：軍直属の軍需工場。兵器・武器・弾薬をはじめ軍需品の開発・製造・修理などを行う施設。呉、横浜、佐世保などにあり、多くの学徒が動員された。写真：呉海軍工廠跡

女子年少工：国民総動員体制の下、女子挺身隊や高校生に混じって、少女たちも工場などで働いた。

への勤務を命じられ、三月三十日に多度津港から輸送船に乗った。自ら進んで希望した身であったが、大勢の見送りを受け出港したときは涙が止まらなかった。横路にある女子寮で八人一部屋、二段ベッドでの生活が始まる。食料難の中なので、麦と大豆の入ったご飯。お腹を空かして故

十五歳の軍需工員

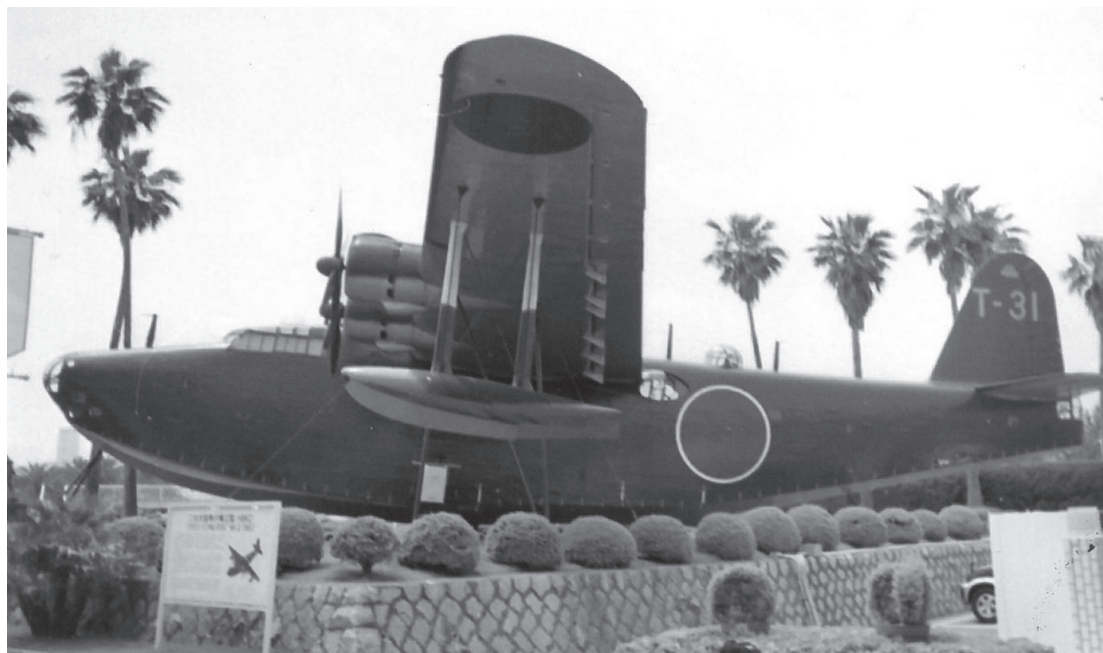
土器町 中田 貞子さん

郷恋しと淋しさにたまらず、夜になると皆で抱き合つて泣いた日々。辛いことばかりだった。でも、戦場で戦う兵士のことを思い励まし合つた。戦闘帽に作業服で軍歌を歌いながら工場へ向かう。作業はボルトの部品検査。「ノギス」という工具も初めて知った。最も基本的な測定工具

で、旋盤で削られた五センチ程の寸法の物を一本一本選別して行く。昼時になると大きいヤカンに一杯のお茶を入れて工員さんへのお茶汲みも、三十分の道程を往復して働いた。

年老いた母と兄が、干しいもや煎り豆など美味しい物を持つて呉まで来てくれた嬉しさは、今も忘れることが出来ない。

呉の空廠への空爆もあり、詫間（現在



二式大艇：正式には「二式大型飛行艇」。長距離の偵察、爆撃機として日本海軍が開発した四発大型飛行機で一時は世界最高の性能を誇った。写真：詫間海軍航空隊所属機。現在、海上自衛隊鹿屋航空基地資料館展示。中田さん所有

作業は飛行艇の洗浄である。船体には海水の浸入を防止するために水密塗料を使用していた。修理の際はその塗料をアセトンやベンゾールで拭いて取り除かなければならない。アセトンは蒸発が早いので気化熱を取る。今のように防水手袋があれば良いのだが、私達は素手での作業だった。

凍傷で腫れ上がり、冬の最中、

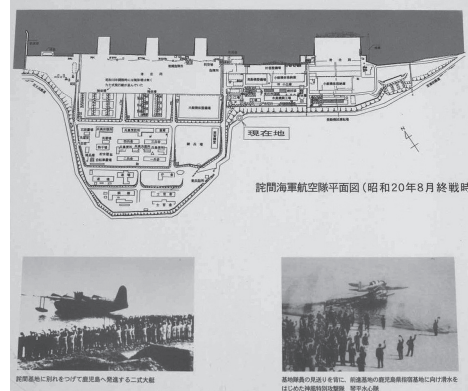
第十一海軍工空廠の歌

いや栄えゆく 秋津世の
御威光は招く大八州
国護る枝の旗の基
さやけき廣の浦波に
いらか並びてそそりたつ
我らが海軍航空廠



昭和20年2月頃撮影。海軍航空廠詫間工場時代。後列中央が中田さん

神風特別攻撃隊出撃の地



詫間海軍航空隊の跡地に建つ揭示板

す。

食事はやはり少なく、近くの農家でミカンやサツマイモをモンペの中に入り切らない程買つて、寮で皆と分け合つて飢えを凌いだのも遠い思い出になった。

詫間工場で鮮明に憶えているのは、米軍の艦載機の襲撃があった

時、私達は、裏山の横穴に避難したが、一生懸命に修理した二式大艇が敵機に撃たれて煙を噴出したことである。恐ろしさよりも悔しさで涙がボロボロ出たのも忘れられない。

もう戦後七十年。私達の青春を捧げた第十一海軍航空廠詫間工場「二式大艇」。

でも悔いは無い。日本海軍が世界に誇った飛行艇を、私達の手で戦場へ飛ばせたあの頑張りが、今を生きる私達の糧となっている。

第十一海軍航空廠詫間工場こそ私達の青春である。

後世の人たちが、私たちの必死の気持ち、苦勞、辛さ、悔しさを少しでも理解してくれればとの思いでいっぱいです。



永久平和を願って

次世代に戦争体験を語り継ぎたい

私の戦争体験談⑤

全て配給制、ひもじい生活

昭和十六年十二月八日、それまで支那事変であったのが、米国の真珠湾を攻撃して、嫌な時代に突入したのです。

それまでは、空襲も無く比較的に静かな日々で、戦地の兵隊さんにも慰問袋を送ったり、千人針を作ったりできました。

その後は、

日一日と物資

が無くなり、

都会に住んで

いる者には、

米、麦、砂糖、塩など生活必需品は全部配給制になり、布も木綿や絹物なども無くなり、スフと呼ばれる科学繊維しかなくだんだん暮らしにくくなりました。何もかも統制されていきました。

昭和一八年に長男が生まれて、その時に晒一丈（三反）を、衣料切符で配給がありました。それで産着を作り、主人や自分の浴衣をつぶして、おしめや子どもの着物

大阪大空襲 命からがら古里へ

平和がずっと続きますように

飯山町 山本 弘子さん

にしたものです。

野菜や卵も配給で、なかなか手に入らなくなり、主人が、故郷である香川へ帰り干しうどんを、姑に買ってもらい、トランクに詰め持って帰ってくれました。それを小さく切ってお米と一緒に炊きご飯にして、何とか空腹をしのぎました。それも一時のこと、なかなか続かず、子どもを負って農村部へ買出しに行きました。大根やいもやその他の物は、なかなか分けてもらえず、大根の葉を分けてもらうのが精いっぱいでした。それをゆでて灰汁を抜き、雑炊の中へ入れて量を増やして食べるというありさまでした。

恐るべし空襲

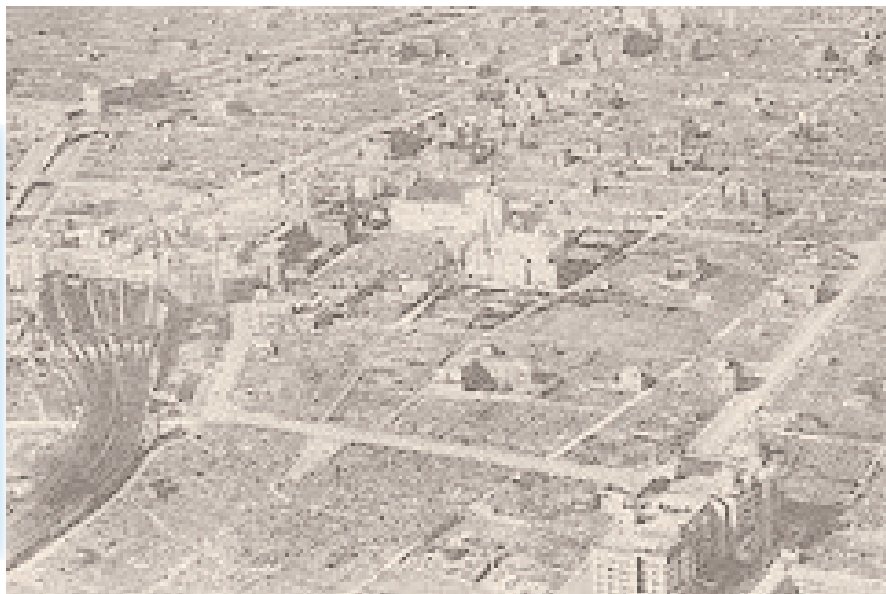
昭和二十年三月十三日の深夜空襲警報のサイレンで、麻疹がようやく良くなった長男を抱き家の中の防空壕へ入り、真っ暗な中、祈るような思いでいました。しばらくして、主人が「中においては危ない。早く外へ出よ」という声に、子どもを抱いて外の広場の防空壕へ飛び込みました。やがて、飛行機



千人針 多くの女性が一枚の布に赤い糸を縫い付けて結び目を作って、兵士の戦場での幸運を祈る民間信仰。

の爆音がして、まず、照明弾が落とされました。灯火管制なんのその、周囲は、昼のような明るさで逃げ惑う人も丸見えでした。

間もなく焼夷弾が落とされ、一瞬の間に回りは火の海と化しました。気がつくとも壕の中の人は皆飛び出し、入り口の人にも火がつき、私も慌てて飛び出しました。主人は焼夷弾の爆風で気を失っていました。私が呼ぶと気がつき、一緒に火の無いところへ逃げました。負う紐とねんねこを持って出てくっていたので、子どもを負ってと



大阪大空襲 1945年3月～8月14日まで8回行われた大阪市を中心とした空襲。一般市民1万人が死亡した。3月13日の初めての空襲には、グアム、サイパンなどから、274機のB29（大型爆撃機）が飛来し、焼夷弾などを投下した。

にかく火の無いところへ逃げました。電柱も雑炊で並んだお店も立ったまま燃えていました。そのうち、飛行機も飛び去り静かになったので元のところへ帰りました。我が家は無残にも焼きつくされ、残り火が燻っていました。泊まる所も無くどうしようかと、思案していましたら、町内の焼け残った家に泊めてくださいましたが、身も心もクタクタでした。

行く先々で受けた温かい心

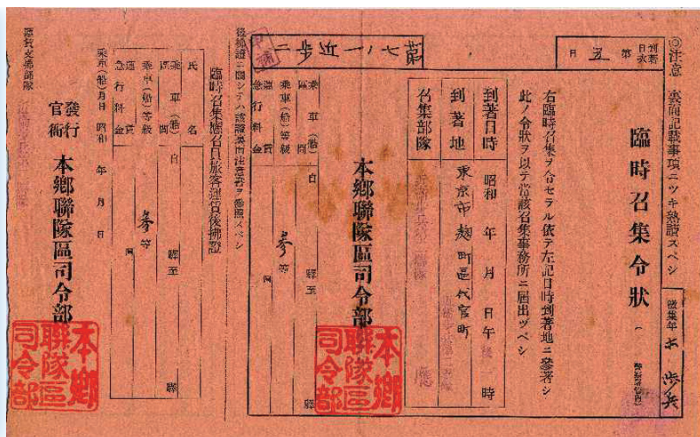
夜が明けて大阪市内の姉の家に行くことにしましたが、地上の電車は駄目でしたが、地下鉄は動いていました。着のみのまま姉の家で二晩泊めてもらいました。

そして、香川県の主人の里へ行くことになりました。無一文でしたが、罹災証明をいただき、二十

日には、召集令状が来ていたので、何としても帰らねばならず、朝六時に大阪駅まで行きました。大勢の人でしたが、召集令状が届いていたので、優先的に乗車できました。

鎧戸を降ろした汽車は、何度も止まり、岡山へ着いたときは辺りも暗くなっていました。そこで国防婦人会の人がおにぎりを作って配ってくださいました。朝からろくに食事もしていなかったので、むさばるようにしていただきました。

宇野線に乗り換え連絡船で、高松へ着いたときは、ホッとしました。ここでも、うどん入りのおにぎりをいただき、琴平行きの汽車に乗りました。琴平に着いたのは十時ごろ、バスも無く駅長さんの計らいで、列車の中で一晩泊めて



召集令状 軍隊が在郷の予備役を召集するために出した令状。赤紙と表現すること多い。理由なく召集に応じなかった場合、罰金刑または拘留と書かれている。

もらいました。三月十六日、まだ底冷えのする車内でしたが、朝まで、うとうとさせていただきました。朝一番のバスで、美合まで乗り、主人の里にたどり着いたときは、ホッとするともに、これから先どうして生きて行こうかと思ひ悩みました。

二度としないさせない戦争

今思いますと、広島、長崎の原子爆弾の比ではありませんが戦争は絶対にしてはいけません。二度とこのような思いを、子孫にさせたくありません。この後、開拓団に入り、口には出せない苦勞をしましたが、今は幸せです。

少し長生きし過ぎたようですが、命ある限り生きたいと思っています。今の平和がずっと続いていくよう祈っています。

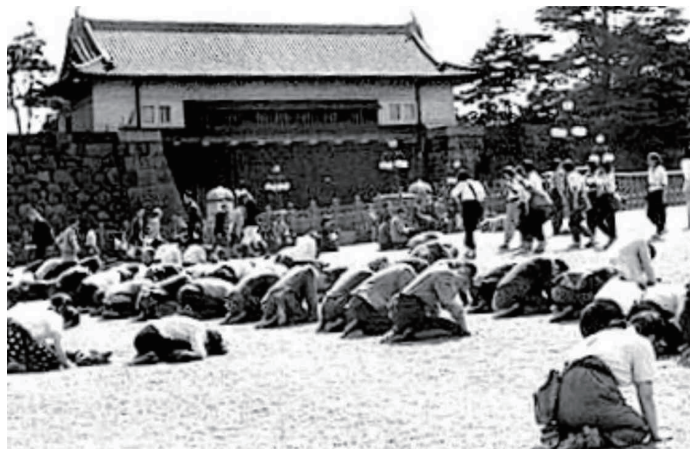


永久平和を願って 次世代に戦争体験を語り継ぎたい

今年、平成27年は、かつてアジアの各地に多大な不幸をもたらした太平洋戦争が昭和20年（1945年）8月15日に敗戦終結、当日から起算して今年で70周年に当たります。

その時、私は旧制中学校1年生でしたが異常で大変な事ばかりだったので、70年前を思い出し、「私の70周年の思い出」として、記載してみたいと思います。

学校は現在の観音寺一高の前身



玉音放送：天皇の内声（玉音）を放送すること。特に、昭和20年8月15日、太平洋戦争の日本の降伏を、昭和天皇が国民に伝えたラジオ放送。この日を終戦の日とした。

となった県立三豊中学校で、自宅から4キロぐらいたる省営バス、自転車、徒歩などで通っていました。履物は配給の靴が藁（わら）そうりか下駄。自転車は時々パンクしたものです。タイヤも新品が無く、縄でリムをぐるぐる巻きつけて走っている人もいました。通学も大変でした。

学校は、他の学校と同じく上級生は都会の軍需工場へ動員され不在、通学してくるのは2年生と我々1年生だけでした。

勉強は幅広く教えてくれ、敵国語と呼んでいた英語も問題なく教えてくれたので驚きました。1か月で2回ぐらいたる農家へ草刈りや麦刈りなどの動員作業に出かけていました。

一方、学校には軍用船舶が無くなったのか行き場のない陸戦隊の部隊、約150人が駐屯していました。2階建ての図書館は将校たちが使い、一般の兵隊達は柔道場や剣道場で寝起きしていました。運動場は、防空壕や畑に変わり、

私の戦争体験談⑥

私の終戦

70周年の思い出

津森町 須藤 宏三さん

兵隊の訓練のためか運動場は常に掘りかえされていました。観音寺町に隣接する杵田町に当時、飛行場の建設工事が進行し、90%ぐらいたる進捗率だったことから、米軍戦闘機が時々飛来し、作業員、通行中の人が機銃掃射で狙われていました。練習機が襲撃されたこともありました。

当時、日本の主要都市は米軍爆撃機B29により、焼夷弾を落とされ、焼失されていきました。昭和20年4月1日、沖繩へ米軍上陸、艦砲射撃や地上戦により4月23日、

沖繩現地の軍最高責任者の自決で組織的な戦闘は終了しました。

軍の指揮

下で犠牲を出しながら協力してきた女子中学生で組織された「ひめゆり部隊」も解体しました。米軍の占領下となったものの島民の集団自決など、悲しい状況が続きました。

7月4日、早朝、米軍機が高知市、徳島市へ空爆した後、高松市にも焼夷弾を落とし、高松市を火の海と化し、1400人近い市民が犠牲となりました。

丸亀からも高松の空が、赤く染



高松空襲：昭和20年7月4日午前2時56分から午前4時42分にかけて高松市に対する米軍B29、116機による戦略爆撃。1359人が亡くなり、家屋およそ19000戸が焼失した。写真は焼き尽くされた高松駅周辺。

いる人がいます。

その後、8月15日、昭和天皇の全国民へ敗戦、終戦の玉音放送がありました。

悔しい思いは残っていましたが全国民が受け入れました。一部、若い将校が自決したなどの情報は終戦後に知り、戦時中は学校側ラジオからも学友からも何も無く、

毎日の通学と勉強に全力を出していました。

一番驚いたのは、玉音放送があった翌日、登校してみると、先輩の卒業記念で植えて成長していた青桐などが切り倒されていたこと。図書館の内外に書類などが散らばっていたこと。兵士たちが寝起きしていた道場の外も、同様な状態

私の戦争体験談⑦

キラキラと輝きたかった青春時代

中津町 吉川 和子さん

若い人に心から話しました。「85歳の私もみなさんのように、若い時がありました。」

今から思ってもなんでも知りたい、やってみたい、とキラキラ輝いていた、とっています。勉強がしたくて、地理でも歴史でも国語も数学も全部頭に入る、楽しい時期だったんです。

なのに、そのころは戦争が真っ最中ですから、授業なんかそつちのけで、麦刈りに行ったり、草刈りに行ったり、飛行機に使う油が足らんからと言って、松の根を掘り起こして油を取って、



松根油：松の根からとった民間飛行機などに使うための燃料。写真は、学徒動員で松の根を掘り起こす子どもたち。



少年航空兵：旧日本陸軍で、徴兵年齢以前の者を対象にした志願制による航空兵。海軍では飛行予科練習生（予科練）があった。

戦地に送ることまでさせられていました。子どもなりに、『オー、そんなことまでするのか』と思いつながらやっていました。

終戦になったときに、大事な青春時代、12〜16歳の知識が一番頭

まっているのが見えたと言っている人もいました。

8月6日に広島市に、9日に長崎市に原子爆弾が落とされ、その被害の酷さと放射能の恐ろしさを初めて知らされました。放射能の被害は、70年が過ぎても苦しんで

あり、私たちも集合したもの、上級生の背丈、服装、顔相などが総て私たちと違う、どこの「おっさんたち」が来ているのかと驚いたのが第一印象でした。以降、2学期として、この上級生と校内整備に取り組み、正常な学習に入ることができた中学一年生でした。

（平成27年夏寄稿）

に入るときに、勉強をさせてくれなかったことが、本当にくやしいと思いました。

今、若い人は、音楽に、映画に好きなことをして、楽しい青春を送っています。戦争になったら、今言ったようになるんですよ。考え方も全部同じ方向にならされて……二十歳に近づいたら、競争のように、少年航空隊とかに入って、飛行機に乗ったまま戦死するんです。

そういう世の中に、若い人を二度と巻き込またくないから、戦争だけは絶対反対です。若い人は政治に関心を持って考えてください。若い青春時代を一番大事に送って欲しいと思いますので。

私のお願いです。私の心からの気持ちです。戦争だけは絶対にやめましょう。」



永久平和を願って

私の戦争体験談 ⑧

次世代に戦争体験を語り継ぎたい

である。海軍鎮守府の呉に近かったので戦争を身近に体験し、終戦直後の混乱も闇市も食料難も体験した。戦時中、私たち子どもも大人に混じり金属を回収し、松の幹にのこぎりで筋を刻んで、松ヤニを採り、根を掘って松根油を集め、池のヒシ、野山のドングリや食べられる野草を採り、食用蛙を

いながら登校する私たち学童の群れや遊び中の私たちを、超低空で、バリバリ機銃掃射した。登校中などは麦畑の畝の間へ逃げ、一斉に伏せるのだが上から見れば丸見えである。

町で唯一の製塩工場があり、構内は私たちの遊び場になっていた。米戦闘機は、工場の煙突をかすめるほどの高さ30メートルの低空からバリバリ機銃を掃射した。銃撃で

ニガリを貯める大きな貯留槽の厚さ10ミリほどの鋼板は、穴だらけになり至近距離での銃弾貫通孔は、反動で銃弾が貫通した手前側へ逆にめくれていた。

戦時下・8年制国民学校

最後入学児童の戦後70年

軍港の町 呉

土器町 實近 昭紀さん

製塩工場の

獲って手足を千切って干し軍用油や食料の足にした。戦地の兵士へ手紙や絵を置き慰問袋を作って送った。都会では、女学生らも挺身隊として軍需工場で働いた。これを「銃後」という。

呉は62回米軍機の空襲を受けたが、その都度、飛来の艦載戦闘機が、高等科生徒の引率で軍歌を歌

私たちはイラク、シリアなどの子どもたちと同じ、いつ死ぬかわからない境遇にあった。私たち子どもの遊びの一つは100メートル

も無数に散らばっている、触るとまだ熱いピカピカの真鍮製機銃葉莢と、地中深く打ち込まれた機銃弾を掘り出して数を競い、金属回収の隣保班長へ届けることだった。「戦艦大和」無きあと、呉港外と近傍海域へ係留され、浮き砲台となつて呉を守っていた歴戦の「戦艦榛名」「伊勢」「日向」3隻と「重巡利根」ら群への米軍機の猛爆と、艦船群や地上砲台の対空砲火戦闘も見た。

呉への爆撃の一部を言うと最初の昭和20年3月19日、艦載戦闘機350機、2回目の5月5日、B29爆撃機152機、7月24日、戦闘機870機、7月28日、戦闘機950機、B29爆撃機110機というすさまじさであった。これら空襲の都度、私たちは飛来する米戦闘機の機銃掃射を受けたが、超低空では、米操縦士の顔や表情も見え、最後には慣れつこになつた。麦畑へ逃げても上からは丸見えだったが、米戦闘機は、私たちのそばを掃射して飛び去り、私たち子どもには当てなかった。

戦後、米操縦士に質問

「民間人をも銃撃するのか」

平成27年3月9日、夜9時からTBS系2時間テレビ番組「私の

街も戦場だった」で、日本各地を機銃掃射した米戦闘機に取り付けたガンカメラで写した、銃撃実写カラー映像を見た。銃撃する戦闘機から見た、銃撃される私たちのことがわかり複雑だった。

レポーターが、90歳を超える銃撃操縦士に「民間人銃撃」について質問すると、「ついでの銃撃、民間人を撃つかどうかは操縦士の気分次第」と言った。実は、私の左足甲の内側には、機銃弾で被弾した5センチほどの傷がある。麦の間へ伏せたとき左足が横へ出ていて米操縦士が外して撃った銃弾に被弾したのだろう、痛いより熱かった。

戦争も末期となり空一面端から端まで、何百機というB29の大編隊が天大空を圧し、一つの生き物のように一糸乱れず陽に銀翼を輝かせ、飛行機雲を引き轟音を轟かせて東進する様は、威風堂々、敵ながら天晴れ。6歳の少年は敗戦を確信した。

原爆の体験そして終戦

呉爆撃のあと、私たちの町は呉市街で、焼けた新聞などの燃えカスや降灰が風で運ばれ降り積もっていた。夜は40キロ先で本が読めるとされた敵機索敵の巨大な探照灯の条光が数十上空を忙しく交錯し美しかった。

昭和20年8月6日、朝礼で校長以下、天皇陛下の御真影を納めた奉安殿を拝礼のとき、ピカッと強烈な光が私たちの影を校庭に写した。続いてドーンと轟音が響き西空にキノコ雲を見る。これ

が広島へのピカドン原爆投下だった。一瞬で14万人が死亡し以後も亡くなり続け、今も被爆手帳を持った15万人余が苦しんでいる。私たちの町から身内を探しに行った人は、次々原爆症で亡くなった。

戦後の混乱 生きるために

「全部は盗るなよ」

朝礼で前に並ぶ

同級女子の髪には虱がうごめき、髪の毛の白い虱の卵を櫛で鋤いて取る。毒の白いDDTを頭から振りかけられ頭も真っ白になってむせていた光景が、今でも蘇る。

教科書を墨で真っ黒に塗り潰し、終戦時の噂で、女・子どもはさらわれると恐れた米進駐軍兵士は陽気で、私たちはジープを追っかけ回した。菓子も砂糖も皆無で甘味は芋や果物、菓子の代わりは煎ったカボチャの種。都会では戦災孤児が一日に何十人も餓死している食料難の中、私たちは徒党を

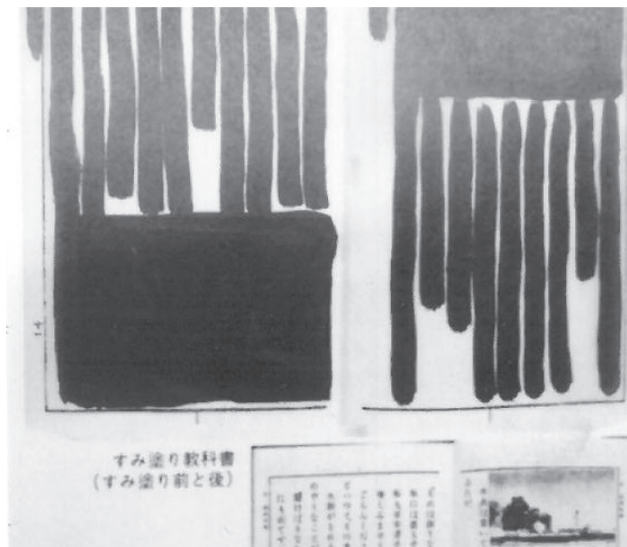


恐れていた米進駐軍兵士は陽気だった。子どもたちが「ギブミーチョコレート」(チョコレートちょうだい)と言って、ジープ(軍用車輛)を追いかけた。(資料写真)

組んで、鶏小屋の卵を盗り、桃やスイカを盗って食べた。被害の家人も「全部は盗るなよ」と寛大だった。

戦争は最大の悪

私は、戦争と終戦直後からの戦後を知っている最後の年代である。戦争は人類が足るを知らない最大の悪である。「賢者は歴史に学び愚者は今を見るのみ」と先哲は言った。歴史を忘れてはならない。戦争の悲惨を知り今の平和を続けなければならない。



GHQ(連合国軍最高指令官総司令部)の命令で、私たち児童が墨で真っ黒に塗り潰した教科書。写真提供…筆者



永久平和を願って

私の戦争体験談 ⑨

次世代に戦争体験を語り継ぎたい

「一億総決起」「撃ちてしまはん」の声高らかな昭和20年4月、私は小豆島の母校、土庄小学校に赴任した。けたたましく空襲警報のどよめく最中、男子教員は軍属に召され、学校長と他に2人、女子は新任教師を含む10数人が校内の運営に当たっていた。当時の学



体育は実戦中心に。女子も薙刀訓練

童は小学校6年を卒業後、その高等科2年まで学ぶか、受験を経て、希望の5年制中学校や女学校または、実業学校に進学するのだった。

全ては

戦争のために

赴任して初めての日は、5年生以上の勤労作業日だった。学校から遠く離れた山林からの薪運びである。巻き脚絆の学校長を先頭に、既に切られた雑木3、4本ずつ縄でくくり背負って帰るのである。今様二宮金次郎たちが、曲がった山道を荷崩れに、足をとられつつ汗を流しながら助け合い、親しさを覚えるのであった。

翌日よりいよいよ学習「欲しがりません勝つまでは」と鉛筆一本も上下から削って使う質素な習慣、教科書も新聞紙の大きさの紙

空襲下に生きる

学童と女教師

飯山町 山本 治子さん

と掛け声勇ましい薙刀訓練や非常時の世相を背景に救急担架訓練など、実戦的プログラムが多く発表されていた。

その頃町内の人々は、敵機から「近日中に爆弾投下」の厳しいビラの散布に、顔色を変え戦々恐々の緊張に溢れていた。

元来米作の無い島では、朝食はお粥が主で、特に、戦時中は糠パンやサツマイモ、時には芋蔓、雑穀などの厳しい食生活であった。

を3回折った面々を広げての学習、また、音楽なども士気を鼓舞する軍歌が高らかに歌われていた。図工なども当時の艦船や飛行機のシルエットを見て、その名称や効能を判断する即戦的要素が取り上げられた。

また、実戦につながる体育は、強靱な精神力とその体力が最も重視された。運動会には、歩調を揃えての分列行進や裸体操、即戦的な手旗信号の発表もあり、女子も負けじと白鉢巻きに「エイ」「ヤア」

そんな中で非常食や、当座の着替え以外の衣類は梱包して、地下倉庫や山間の洞穴などに疎開貯蔵するなど、大空襲の備え万全で、夜間の特に厳しい灯火管制に町民の神経はただならぬものがあった。

学徒動員の命下る

そんな慌ただしい非常時、ついに学校にも学徒動員の命が下された。私も高等科1年女子組30人謹んで受け、身の引き締まる思いだった。

今日よりは、われ19歳の女教師、校長兼女教師引率責任者兼看護師の重任が、肩にずしりと重く、身の引き締まる思いと覚悟であった。

古着の紵で作ったモンペ姿に、綿入れ防空頭巾と救急袋を肩への出で立ちである。

毎朝奉安殿前に学徒一同整列、最敬礼、高らかに「勝ち抜く誓い」の宣誓、再びは家に帰らぬ「行きます」の出発のことは。4列縦隊に軍歌も高らかな学徒の出陣、今日よりはペンを捨て軍被服工場へ縫製参加の尊い使命。工場への道のり5キロ余り。

ある朝、人家無く麦畑一面の農道にさしかかった時、前方遙かより爆音の響き、目を凝らせばB29

重爆撃機の編隊10機余り、こちら目指して飛来する。

「しまった！ どうしよう！」30人の命危うし。私は動転しつつ「伏せ」と叫ぶ。児童一斉に道辺の麦畑に潜り込む。頭巾を両手で抱え1秒：2秒：3秒頭上からは大地を裂かんばかりの大轟音。息を止め目を瞑り、無我夢中に神に祈りつつその時を待つ。ドカンと大きな破裂音の錯覚に仮死状態しばし続く。

どれほどの時間だっただろうか。わなわな震えつつ、次第に遠ざかりゆく爆音に、やおら頭をもち上げ、青ざめた生徒とほっと胸を撫で息を吐くのだった。

「あー怖かった」「死んだと思

った」同感しながら震えの止まらなかった一時であった。青ざめた顔、涙ぐむ顔、生涯忘れ得ぬ体験こそ、苦境に生き抜く今後の原動力になる事と思われた。

不戦の誓いを胸に

工場に帰りいつものように、かましい動力ミシンの音と渦巻く埃の中に、軍衣のボタン付けに勤しむ学徒14歳の姿であった。

とある日の昼食後、工場前の瀬戸内海遥か屋島の沖で、日本の輸送船らしい船影が、敵機編隊の集中攻撃を受け、のたうち廻り艦船



運動場が野菜畑になり収穫を喜ぶ

しさに地団駄を踏むのみであった。何の反抗もできず、自分を悔しみ残念がるのみであった。こんな悲惨な戦場を目の前にして、学徒少女たちは「いやだ！こんな戦は二度としてはならない」と不戦の願いを強く固く誓うのであった。

● 荒海の時の流れに

揉まれ揉まれ

● 遠つ日の苦しみ悲しみ

秘めもちて

漸く香る梅花清しも

● 右上がりの癖字はそのまま

綿々と賀状の交流

七十余年を



永久平和を願って 次世代に戦争体験を語り継ぎたい

私の戦争体験談 10



はじめに

戦後70年、戦争体験者も高齢となり、「戦争」が風化されつつある今日、「広報丸亀」の「戦争体験談募集」の記事を見て、この機会を逃してはいけないと思い筆を執りました。

「ミッドウェイ海戦」で、海軍の主力空母と優秀な飛行機搭乗員を失った日本は、転進（撤退）や玉砕を余儀なくされていたころ（当時私たちには知るよしも無かった）、昭和19年11月11日、私が19歳になったばかりの秋、丸亀西部32部隊入隊の召集令状「赤紙」が届きました。この日から私は約3年間青春時代の真ん中、一人の初年兵、皇軍戦闘員として戦っ

て、終戦、引き揚げ……。そして、今年92歳を迎えます。

荒野の行軍 戦闘そして行軍

入隊して、2週間で転属命令を受ける。日々厳しくなる戦況の中でどこに行くかは誰も知らない。軍装は、防寒具のみ、銃はほとんど無いまま閔釜連絡船に乗船。列車で朝鮮半島（当時日本領）を北上、さらに中国国境（山海関）を越える。太陽が東の地平線から昇り、西の地平線に沈む。南京・上海方面へ。

昭和19年秋、19歳で「赤紙」 大陸での青春時代3年間

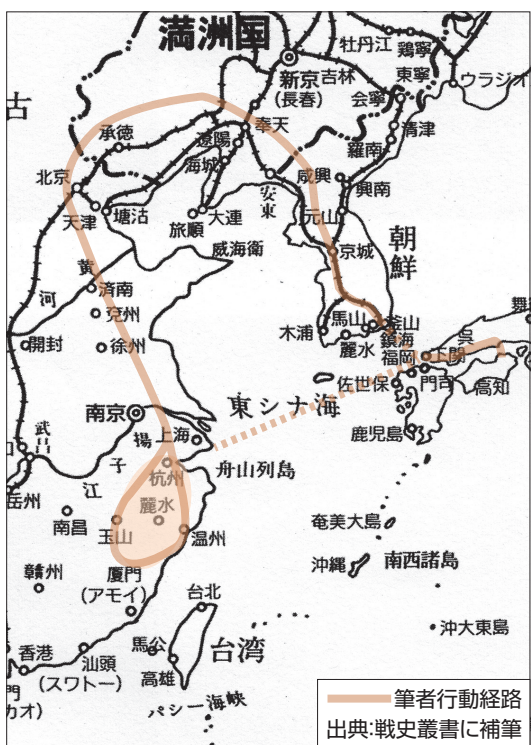
土居町 今田武二良さん

たのだが、当時「アメリカ軍が台湾方面から、福建省あたりに上陸してくる」という情報があり、それに備えるための南進だったようだ。

さて、私は重機関銃中隊に配属された。重機関銃は分解し、一人

32キロを担いでの行軍。ふらつく
と怒鳴られる。弾薬は馬に乗せて
の移動。暗くなるまで、分解、組
み立ての訓練が続く。暗くなれば
歩哨、不寝番にも立たなければい
けない。敵襲はいつあるか知れな
い、匪賊も出る。そんなある日、
久しぶりに屋根の下で寝られると、
集落で靴を脱いでくつろいでいた。
日が山の稜線に差し掛かったとき、
頭上に重迫撃砲の一斉放火。「敵
襲！」優秀なチェコ製の敵の機関
銃が火を噴いた。この戦闘で、何
人もの犠牲が出て、味方の重機関
銃小隊は破壊された。隊は編成し
直された。誰一人文句を言う者も
無く粛々と移動。

戦争という悲しさとむなしさを、大陸の荒野が吸い込んでい
き、空はゆっくり白んでくる。行
軍に次ぐ行軍、梅雨時はずぶ濡れ
になり、炎天下は避けて、夜間の
行軍。暗闇の中、睡魔と過労との
戦い。
忘れられない戦いがある。白石
峠の戦いである。撤収のため、上



「この作戦で戦野に散った戦友のご冥福を心からお祈り致します

合掌」

何日か経ったある日、水牛を使
って水車を回している子どもたち
を見つけた。我々が、少し覚えた
中国語で近づいていくと話し返し
てくれる。笑顔がとてもかわいい。
「名古屋に行ったことがある」「
日本に行きたい」という子もい
た。やがて、父親たちも連れてく
る。日中友好・親善の平和なひと
時だった。なんで戦争なんてする
のだろう。

待ちかねた「かえり船」 感無量。家族との再会

終戦後半年も経つと、「いつ帰
れるか」と、皆そればかりの思い
である。「もう近々帰れる」と聞い

ては何度も延
びてきたが、
今度は確かな
ようだ。「立
つ鳥跡を濁さ
ず」宿舎をみ
んなできれい
に掃除する。
いよいよ乗船
1000トン
の船は、客室
もデッキも人
でいっぱい。
夜間は、機雷に触れる危険から、
朝日とともに出港。田端義夫の
「かえり船」だ。
玄界灘から博多港に入港。いよ
いよ上陸。「生きて祖国に帰って
来れた」と実感した。港は、復員
兵や迎えの人たちで混雑してい
る。MPたちが、我々にDDTを
噴きかける、背中からズボンの中
まで真っ白だ。
宇野から、連絡船で高松に着い
た。「あつ」と驚きで、一瞬息が
止まったような気がした。港から
紫雲山まで焼け野原。「空襲があ
ったとは聞いていたが、これほど
無残な光景を眺めるとは。さぞ多
くの犠牲者が出ただろう」丸亀駅
に着いて、家族との再会。全員無
事で元気な姿で会えた。嬉しさこ
の上無し。

海へ向けて北進する日本軍は、中
国の正規軍や匪賊、馬賊などから
見れば手負いの獲物に見えるのだ
ろうか……。待ち伏せに合った。
敵の弾が、頭や身の回りに、ブス
ブスと突き刺さる、小さな石でも
弾避けに頭の前に置いたりもし
た。多くの犠牲者が出た。また、
ある日の早朝、大きな城壁に差し
掛かったとき、突然城壁の上から
「パンパン」という銃声がした。
突然の敵襲。味方重機が火を噴い
た。大砲は城門を打ち破る、する
と、軍刀をかざして将校が突入、
兵隊たちも歓声を上げてそれに続
く、「歩兵の本領」とでもいうか
凄いのを見た。潜んでいた多くの
敵兵は、1キロ先の城門の一角
から逃げ出て土蔵に入って行くの
を確認。それを重機関銃で狙い打
つ。土蔵には大砲をぶち込む。土
蔵が傾いた。これが戦争。殺るか
殺られるか……。

子どもたちの笑顔と水牛 なんで戦争するんだろ

上海近郊に到着。上海に軍曹と
出張に出掛ける。街は賑わい果物
やパンがたくさん並んでいる。浴
衣姿の日本人女性が優雅に見え
る。映画館でエノケンの映画を観
た。その時ニュースを見て驚い
た。B29の空襲、新型爆弾（原子

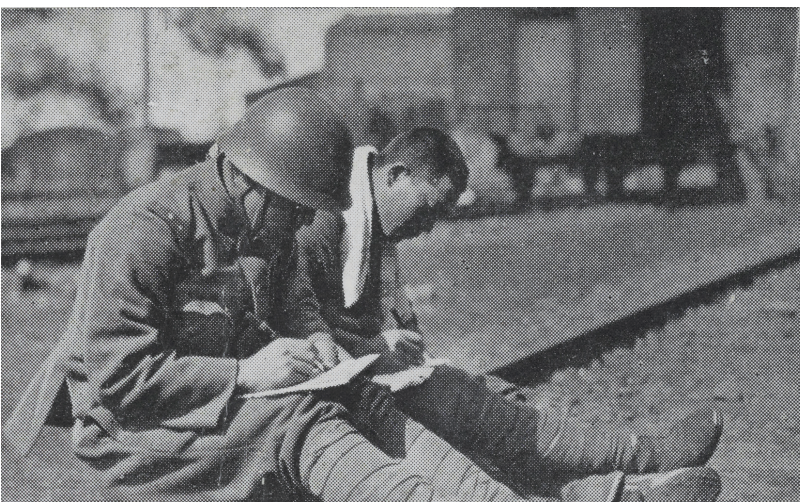
あとがき

荒廃したあの時代、生き抜いて
きた人たちがまた、不幸にして犠牲
になられた人たちが、築き上げて
来てくれた今日の日本。中国の偉
人曰く「国敗れて山河あり、城春
にして草木深し」の詩のごとく、
都市も荒廃から四季が巡り、草木
が茂り、緑となし、花は咲き、人
々に生きる希望と復興の力を与え
てくれた。資源の乏しい日本が、
今日の経済大国として列国に準じ
て来れたのは、平和な中で、医療、
科学、資源の開発等技術立国とし
て、世界に貢献できるように頑張
ってきた賜物と思う。

2度と戦争はしない日本、平和
で緑豊かな暮らしができますよ
う、これからの方々にぜひお願い
申し上げます。
※筆者は、昨年末他界されました。
ご冥福をお祈りします。

用語の説明

歩哨 陣地などの要所に立つて警
戒 監視にあたること
機雷 多量の爆薬を入れ、水面下
や海底に敷設し、艦船がふれた
り、近づいたときに爆発して、
破壊、沈没させる水雷
MP アメリカ陸軍の憲兵（軍隊
内の警察活動をする兵隊）
DDT 農薬の一種

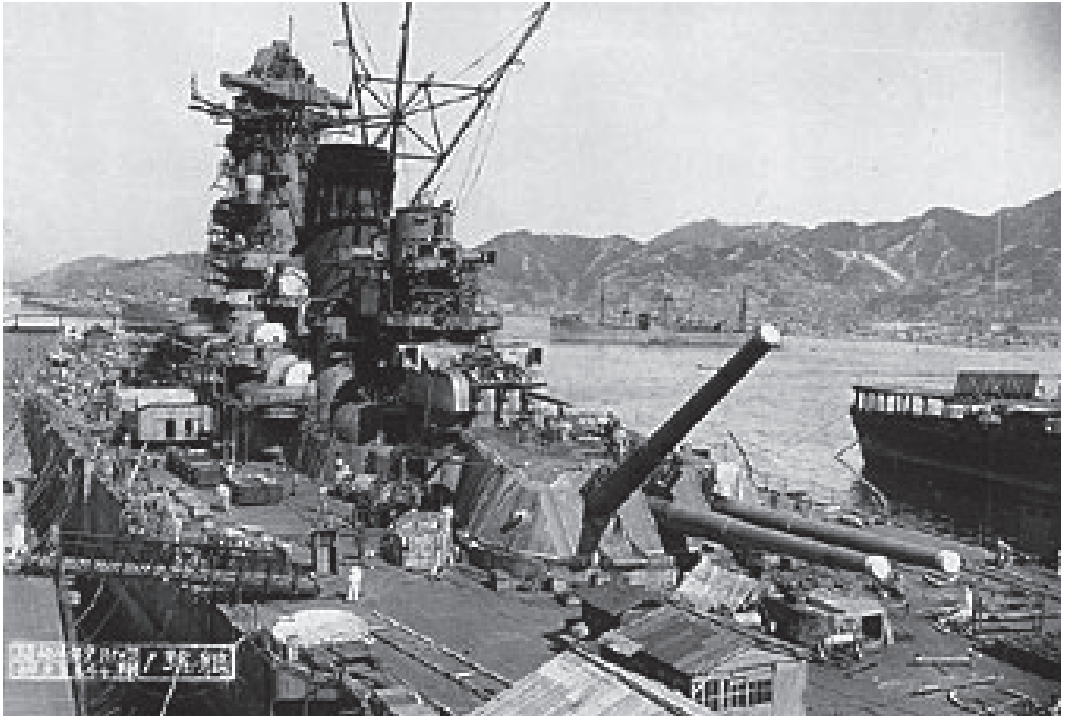


懐かしい故郷へ陣中で手紙を書く兵士 提供：平和祈念展示資料館



永久平和を願って 次世代に戦争体験を語り継ぎたい

私の戦争体験談 ⑪



建造中の戦艦大和(資料写真)

昭和14年、私は垂水
小学校高等科2年を卒業と同時に、広島県呉市にあった「海軍工廠」に就職しました。15歳の春でした。

「海軍工廠」とは、海軍の艦船、兵器、弾薬などの製造や修理、実験などをする施設で、旧日本海軍では、呉のほかに横須賀、佐世保、舞鶴の各軍港にありました。そこは、広大な敷地に、工場や事務所、宿舍、病院などが立ち並び、何千人の人がそれぞれの部署に分かれて働きながら暮らしていました。私は、火口部、

「呉」で機銃掃射を受け 同級生は「特攻隊」に散る

垂水町 江戸 秀信さん

後に会計部に属して主に事務的な仕事をしていました。入所当時は、真珠湾攻撃の2年前だったので、敵機が飛来するようないたように思います。しかし、中国とは戦争中。ヨーロッパではファシズムの台頭によって確実に軍靴の音が響いて来ていました。

そんな中、私は、呉で建造をすすめていた戦艦「大和」の進水式を見ることができました。全長約260㍎、山のような巨大な船が瀬戸内海に浮かぶ姿は圧巻でした。1940年8月8日、日米開戦の1年4か月前のことでした。

1941年7月、日本は南方の石油などの資源を求めて、仏領インドシナ(現在のベトナム)に進出すると、すぐアメリカは石油の対日全面禁輸を実施。イギリス、オランダもこれに追従し、いわゆる「ABCD包囲網」



燃料片道で多くの若者が散った(資料写真)

1942年の「帝都初空襲」(東京への初めての空襲)そして、全国の主要都市が焼け野原になった日本本土空襲は、1944年から始まりました。呉軍港への空襲は1945年の春から何回もあって、多くの戦死者がでました。軍港への爆撃は焼夷弾ではなく、爆裂する爆弾で多くの人が犠牲になり、戦艦や空母、巡洋艦、潜水艦が沈み甚大な被害を受けました。また、呉海軍工廠への空襲は5月5日、B29の大編隊290機による空襲で、およそ1900人が亡くなり、工廠施設のほとんどが破壊されました。

いかけられました。彼らは、上空でエンジンを切って滑空するのか、突然無音のまま地上近くまで急降下して来て、私たちに襲いかかってきました。そのときの恐ろしさは、今も忘れられません。終戦で、古里の丸亀に帰り同年代の消息を聞いても、悲しい知らせばかりでした。同級生の中には、少年航空兵に志願した者もいました。彼らは全員、燃料片道で行ったきり帰って来ませんでした。(特攻隊)「運よく生きて帰れた自分は、当時軍港にいながら何もできなかった」と涙を流したこともありました。

今、世界を見渡しますと、戦乱の中、市民が逃げ惑い、子ども

もたちが犠牲になっている現実を直視し、戦争の悲惨さ、平和の尊さを学び伝えなければいけないと思いました。ご近所のM

ができ日本は孤立状態になりました。そして、ついに12月8日、アメリカの太平洋艦隊の基地、ハワイ真珠湾を奇襲、太平洋戦争に突入しました。

開戦以来快進撃を続けていた日本軍は、1942年6月のミッドウェイ海戦で完敗して形勢逆転。日本軍が進出していた南方の島々に輸送は断たれ、援軍を送れず敗退、玉砕が相次ぎ多くの兵士が飢えと病にあえぎながら死んでいきました。しかし、そのような事実は、国民には知らされず。「進め一億火の玉だ」「欲しがりません勝つまでは」などのスローガンに踊らされ「戦争」という泥沼に入り込んで行きました。



支那事变従軍の記念の徳利と盃
(提供:平和祈念展示資料館)

さんからの誘いもあり、市役所の広報係の人にお話をして文章にさせていただきました。なにごん、高齢ですので、記憶も定かでないところもありますが、「次世代に過去の過ちを二度と起こしてほしくない」という一念で、心を込めてお話しさせていただきました。

(聞き手・広報担当 中年明)

用語の説明

玉砕 日本軍が発表した言葉。部隊の全滅の意味。援軍や補給ができないまま「見殺し」にしてしまったと軍司令部への責任論回避のため、玉が美しく砕けるように潔い死を印象付けた。
特攻隊 特別攻撃隊の略。爆弾などを搭載した飛行機、高速艇、潜水艇などで体当たりする決死部隊。



永久平和を願って 次世代に戦争体験を語り継ぎたい

私の戦争体験談 ⑫

地平線を見ながら

過ごした少年の日

城東町 小佐古公士さん

「歩調をとれ！」校門へ入ろうとしたその時だ。国民学校初等科5年生1君が、7人の登校班の先頭に出て号令をかけた。

私は4年生、弟は1年生、城北小からの転入生だった。昭和18年である。この春には、山本五十六連合艦隊司令長官機がブーゲンビル島上空で撃墜され戦死、秋には出陣学徒壮行会が、雨の中、神宮外苑競技場で盛大に挙行され、戦

況は慌ただしくなってきたようだ。そうとは知らず、父は、家族をソ満国境近くの日本軍基地の町に呼び寄せたのである。関東軍の航空隊に赴任して以来3年越しの念願であったようだ。

校舎はレンガ造りの平屋一棟で、草原の中にぽつんと建ち、満州人の町や日本軍基地が離れてあった。運動場の向こうは草原に続く草原で、ずっと向こうに地平線が見えていた。

全校生は30人足らず、軍人、軍属の子女と日本の商社の子女だけの日本人学校であった。6年から4年と、3年から1年の2クラスに編成した複々式の授業であった。学校名を「杏樹在満国民学校」と呼んでいた。

この学校では、知的能力より戦いに勝ち抜く力を培おうとしていたのだらう。

内地には無かった科目で「教練」と「作業」があった。(後に戦況不利になった頃には内地の学校と同じだったのだが)「教練」は一人一

人が兵隊さん用の木銃を携え、

広々とした校地を生かして設けた障害物や塹壕、防空壕を次々攻め立て、訓練の最後はわら人形の敵兵に「突撃！」の命令のもと突進し、木銃を突き刺して終わりというものだった。小4の私は上級生のやり方を見よう見まねで必死だった。

「作業」は農作業が主で、時には樹木の移植や補植も行った。仕事量が半端でなく半日単位だ。掘り進むと凍土になり苦勞もあった。また、道具は大人用だったのかどらなかつた。一方、畑仕事は一人20坪程の土地が割り当てられ、作物は各自で決める。私は6年のM君に教わりながら、トウモロコシ、キャベツ、ジャガイモ、大豆などを栽培した。こうした労働教育重視の背景には、開拓魂を身につけさせたいという意図があったのだらう。



できたぞ! 天然スケートリンク。
基地で働く人たちと(昭和19年1月頃)

大豆の収穫が終わると、間もなく冬が来た。満州には春と秋が無いと聞いていたが短い。氷が張り始めると、運動場のトラック部分に水を流してスケートリンク作りの作業が待っていた。4年以上が担当で2人1組の6組で交代して当たった。水は地下水を手動式ポンプで汲み上げ、それを樋に流し込んで順次広げるといやり方であった。苦しみながらも目に見えてリンクができていく様子に、努力のあとが見えて楽しめた。いよいよスケートだ。初心者で私であったが5年のY君の手解きで数メートル転ばず滑れたときのことは忘れられない。毎日、放課後になるとリンクに出た。しばらく滑ると極寒でも体が火照り、滑る楽しみはタイムを競う楽しみに移り、陽が傾くまで滑った後、リンクの補修をして下校した。満ち足りた冬の日々だった。

この学校の特色に、兵隊さんとのつながりがあった。週に1回、半日であるが兵隊さんが指導に来てくださるのである。師範学校卒の兵隊さんだったので、子どもの心理を理解し子どもたちを喜ばせる授業であった。会える日が楽しみで、特に本の読み聞かせは待ち望まれた。先生は野中上等兵と斎藤伍長といった。いつからか来な



満州の自宅玄関前で
筆者(当時4年生)左
と弟(1年生)。帽子は
城北小学校の制帽

くなつたが、戦場に赴いたのだらうか。戦死されたのだらうか。

もう1つある。町の中央にホールを備えた会館があつて、ここでも何回か慰安会が催され、その都度、子どもたちには賛助出演の声

がかかった。出演するより兵隊さん

の出し物にひかれた。そこには大人文化のおもしろさがあつたからだ。落語、漫才、芝居……特に「どじょうすくい」は、抜群のおもしろさだった。その頃流行して

いた古賀政男の歌もあつた。

♪花摘む野辺に日は落ちて……

……ああ誰か故郷を思わざる

聞き入っていた兵隊さんの面差しが思い出される。歌の題名が反対のことを疑問形で表現したところが、望郷の念を一層強くにじませていると後々思った。

目まぐるしい学校生活を送っているうちに1年が過ぎ、昭和19年の6月になっていた。7月にはサイ

パン島で、日本の守備隊が玉砕。身辺がにわかになつていた。父が属していた航空隊は、精鋭の関東軍と共

に満州を後に南方に動員命令がくだつた。父は私たち兄弟を座敷に呼び「比島(フィリピン)へ行く。母を助け、兄弟力を合わせて生きよ」と短い言葉を遺し、翌日、家を出た。夕方、見送りに行ったら大勢の兵隊さんも乗りこんでいた。列車はくれないずむ夏の地平線に向かつて煙と一緒に少しずつ小さくなって南へ消えていった。

※写真はすべて筆者提供

用語の説明

関東軍 中華民国からの租借地だった関東州(リャオトン半島)の守備や南満州鉄道の付属地の警備をした部隊。
軍属 軍人(武官または兵)以外で軍隊に所属する人。例えば、主計や通訳、法務などの事務的業務、車両・航空機など保守点検や整備をする人など。



永久平和を願って

私の戦争体験談 ⑬

次世代に戦争体験を語り継ぎたい

昭和20年7月の初め、空襲警報で目を覚まし、急いで土器川の土手に上って東を見れば、我が家の東にある青ノ山の南のふもとが燃えているように見えた。それから数日後、同じ警報で起きてみると今度は、青ノ山の北のふもとが燃えているように見えた。それが高松と岡山が空襲で焼けた炎だった。

8月になって間もなく、広島に新型爆弾が落とされたが、これは熱や光が強いので、白い物を頭からかぶっておれば助かると言われる

ていた。それが原子爆弾だったと後でわかった。

話は少しさかのぼるが、土器国民学校の生徒だった私たちは、勉強はそつちのけで、運動場を掘り返してサツマイモを植えた。味は良くないが、たくさん収穫できる

「護国」という種類のイモだった。みんなで懸命に植えたサツマイモだったが、台風で土器川が大水になり、運動場が水浸し、水が引いた後急いで掘り出したが半分以上はだめだった。また、それぞれの集落ごとに、空き地の開墾を学校から言い渡され、私たち上分地区の子どもたちは、土器川の土手の下の砂地を見つけて、そこを掘り返し畑にした。肥料には馬糞を集めることにした。稲ワラで織った直径80cm、深さ40cmぐらいの「ふご」と呼ばれる袋を2

土器国民学校での思い出

土器町 西池 一美さん

人で担いで拾い集めた。現在のような車社会ではないので、大八車だいはちぐるまと呼ばれる馬車や、兵隊さんが乗った馬などがよく通るので、いたるところに馬糞が落ちており、「ふご」に半分くらいはすぐに集めることができた。それを畑に撒き、耕して野菜の種を蒔いて世話をした。それから土器川の土手に生えている「チガヤ」や「チヨマ」を刈り取りしていた。チガヤは乾燥して、チヨマは皮をむいて学校で集めて供出した。また、たんぼのあぜ道に生えている彼岸花の球根を掘って集めて供出した。

た。現在のようにあぜはコンクリート化していない時代なので、あぜを掘り返して農家の人に叱られながらの仕事だった。

後になってわかったことだが、チガヤは兵隊さんが使う「ミノガサ」になり、チヨマは繊維を取って軍服を作る材料に。彼岸花の球根はアメリカ本土を直接攻撃する風船爆弾を作るための糊のりの材料だったそうだ。

今でも目の底に残っている風景は、鉄砲も持たず、ミノガサを着



「戦争という言葉は2度と聞きたくない」

てとぼとぼと雨の中を進んで行く兵隊さんの列だった。戦時中、学校は男女別々だった。戦争が終わって男女共学になった。それまでは、小学校高等科1年、2年が一緒になり、男女別の教室を使っていたが、学年別男女共学となり、教室内が急に華やいだことを思い出す。

あれから数十年が過ぎたが、今でも忘れることができない、ある意味で、懐かしい思い出でもある。

用語の説明

供出 国民や民間の物資を、政府に提供すること。戦時下では、金属、毛皮、宝石なども提供した。

絵…高松空襲を子どもたちに伝える会発行「えほん高松空襲」より



逃げる漁船から見た高松空襲



永久平和を願って 次世代に戦争体験を語り継ぎたい

私の戦争体験談 14

昭和18年10月、旧制丸亀中学3年生の2学期、私は松山市予科練に入隊しました。そして済州島（朝鮮半島の南にある島）で飛行練習生となつて、飛行機乗りになりました。その後、釜山（韓国南部の都市）の航空隊に配属されま



転隊のため釜山飛行場出発の風景(1)

した。

その頃の日本軍は、前の年にミッドウェー海戦で大敗し、多くの空母や飛行機、パイロットを失いました。また、山本五十六連合艦隊司令長官が、ブーゲンビル島上空で戦死。南方に展開していた日本軍が、各地で玉砕するなど、戦況は悪化の一途をたどっていました。

そんな頃の航空隊には、戦闘機は無く、私が

預かった機は、複葉の93式中間練習機、いわゆる「赤とんぼ」の愛称で知られるかわいらしい機でした。

私に特攻の命が下ったのは、昭和20年4月8日、終戦の4か月前でした。

一口に特別攻撃隊（以下特攻）といっても色々あります。特殊潜航艇いわゆる人間魚雷や、飛行機



特攻機は練習機

「赤とんぼ」

いざ出撃の前日に終戦

城東町 田中 卓さん

で、やはり他の部隊では、九州の上空で打ち落とされた特攻機もあつたようです。

出水基地上空に近づく、兵舎や滑走路は、ほとんど破壊され、穴だらけの飛行場に何とか着陸できました。兵士の多くは、山の中の洞窟に潜み、特攻の出撃に備えていました。総勢4000人、うち飛行機乗り130人。すべて特

の腹に取り付けて、上空で切り離し滑空して体当たりするものなど……。いずれにしても燃料片道の決死の捨て身の攻撃です。多くの若者が、日本の平和と繁栄を願って散っていきました。

釜山航空隊の隊員たちは、特攻の訓練をするため、もう2度と会えない今生の別れをして、九州の各基地に分かれて飛び立って行きました。

私の分隊は、鹿児島の出水の基地です。国内の移動とはいえ、制空権はほぼアメリカ軍にあったの

攻隊員です。

その頃、日本の偵察機が、沖縄周辺海域の写真撮影に成功し、私もその写真を見る機会を得ました。それは、黒い画用紙に白ゴマをばら撒いたような感じでした。

「ゴマ粒一つ一つは、アメリカ軍の船だ」と聞かされ驚きました。当時5000隻の敵艦船が九州近海にいたようです。「より取り見取り、好きな船見つけて突っ込んでくれ」と冗談。

私の分隊は、8月16日に、さらに南の基地沖縄本島の北東にある喜界島に移動して特攻を決行する予定でした。

8月15日、玉音放送があるのとことで、大きな部屋にみんな集まって聞きました。

「日本は負けたんだ」

読者の多くは、隊員たちは敗戦の悲しみと同時に、「助かった」と胸を撫で下ろしただろうと思われています。しかし、隊員たちにはそういう気持ちはありません。ただ淡々と、現実を受け止めていました。

特攻命令を受けてから、否、予



転隊のため釜山飛行場出発の風景(2)

科練に入った時から、「死ぬ」のは覚悟していました。ただ不安だったのは、「上陸してくるアメリカ兵にいかに対応するか」が兵隊たちの当面の課題でした。「全員右手をもぎ取られるぞ」などのデマ情報も飛んでいました。そこで各自私物を大きな袋に入れて、山に逃げ込んで様子をうかがっていました。

今年満89歳の私、戦後70年以上が経過して、私のような経験をした人も数少なくなりました。実は私は、戦後、このようなお話は一切誰にもしませんでした。昭和47年に、全国の特攻隊員の戦友会が、熱海で行われました。80人ほどの元隊員が集まり、



戦友たちと談笑したところから、平和の大切さを、次の世代に伝えるため、お話をするのも私たちの大きな任務と思い、お話をさせていただきます。

今回は、私が所属する奉仕団体の同僚会員Yさんの紹介で、市の

広報担当者に話を聞いていただき、生まれ育った丸亀市の広報紙に掲載していただき光栄です。

どうか世界の人々が、できるだけ早く、互いに尊重し合い、助け合って暮らしていける時代を創っていただきたいと思います。

※写真はすべて筆者提供。

※筆者は昨年夏、他界されました。

ご冥福をお祈りします。

（聞き手 広報担当中年明）

用語の説明

ミッドウェー海戦 太平洋のハワイ諸島北西にある環礁をめぐって、1942年6月、日本海軍とアメリカ軍が戦い、日本が航空母艦4隻、艦載機多数と多くの優秀な搭乗員を失い大敗、その後の戦局に大きな影響を与えた海戦。



永久平和を願って

私の戦争体験談 15

次世代に戦争体験を語り継ぎたい

父は明治45年生まれ、農業一筋に一生懸命働きあの戦時中の物資不足の中、ご近所の皆さんと助け合って苦しい中を生き抜いて……

話をすることは戦争のことばかり、毎日空襲警報のサイレンの音を聞くと、生きた心地がしない……とよく話していました。

昭和19年当時私は、小学1年生、父は35・36歳だったと思います。いつも心の中では「戦争にだけは行きたくない」と思っていたのですが、口に出してはいけなから、耐えて耐えて、野良仕事に励んでいたのだと思います。

出征した父の思い出

——もう戦争は嫌だ——

垂水町 宮田 文子さん(旧姓横田)



太平洋戦争勃発。ハワイ真珠湾停泊中のアメリカ艦船を日本軍が奇襲

ところが昭和19年の春、海軍兵として召集令状(赤紙)が届きました。近所の人たちが次々とお祝いに訪れ、無事を願って千人針をしてくれたことを覚えています。そして、出征当日は、大勢の人た

した。父が祖母の葬儀に一時帰郷してきましたが、内地だから帰れたのだと思います。父の姿を見てびっくりしました。立派な水兵服に帽子をかぶって何と凛々りんりゃしいことかと驚きました。話によると、軍隊の中では炊事兵として働いている。1日何百人もの食事を作っているとのこと。もともと器用だったからそんなに苦しくない。そして、兵隊さんの食べ残しを食べて

か、父はよく肥えていました。でも、時に体罰があつて、棒で体中殴られる。その痛さに耐えられなく辛い悲しいと言っていました。

祖母の葬儀は一泊だけの帰宅で、翌朝父は「もう生きて帰れんかも」と言葉を残して旅立ちました。駅まで送って行った母と私に、父は涙を浮かべていました。

その年の7月末父が、「行き先は知らされず。8月15日に佐世保を軍艦で出港の命が出た。本当にこれが最後と帰宅を許された」と一泊で帰ってきました。父はどこに行ってしまうのか……。私たちが家族全員で泣きました。

父が出港すると言っていた8月15日は、終戦の日となり、私は小学校で、玉音放送を聞かされました。「今日出港すると言っていた父の運命は……」そればかりが心配でした。

父は運がよかった。1日違いで出港しなくて済んだ。戦争は終わった。私は神仏に感謝しました。

終戦から一か月ほどしてやっと父は家に帰ってきました。「もう戦争は嫌だ。平和な世界が来る」とその感激の涙が止まりませんでした。

もう一つ皆さんにお話ししたい

ことがあります。父は、復員の時同じ部隊の上司で、年齢は父より一回り若く沖縄県出身の山城さん



召集令状(赤紙)一枚で、多くの兵士が戦地に赴いた

という兵士を連れて帰って来ました。「山城さんは、戦争が終わっても沖縄へは帰れない。しばらく一緒に生活するから……」

当時私たち子どもには、どうして故郷に帰れないのか理解できませんでした。「いつになったら沖縄へ帰れるのか、家族と会えなくて悲しいだろう」

私はその時まだ戦争は終わってないと思えました。半年ぐらい一緒に暮らして父の知り合いの女性と結婚して隣町で所帯

を持ち、少し安心しました。

昭和30年、山城さんとお会いでき、いろいろな思い出話で、涙があふれました。彼曰く「戦後一度も沖縄に帰ったことはなく、肉親にも会ったことがない」とのこと。戦争の傷跡に一生悲しみ苦しんでいたと思います。今は、あの世で、父と平和な世界を願っていることでしょう。ご冥福を祈るのみです。

もう、父の話ができるのは私しかいなくなりました。悲しいですが、戦争体験談は語り継がなければいけないと思います。



全国の主要都市は、アメリカ軍の空襲で焼け野原となった



永久平和を願って 次世代に戦争体験を語り継ぎたい

私の戦争体験談 16



21歳の頃

太平洋戦争での戦闘や公務中に負傷や発病し、障がいを負った軍人や軍属らでつくる「日本傷痍軍人会」は、平成25年11月創立60年を迎えました。会員の高齢化と減少により同日解散しました。「われらの後に傷痍軍人をつくるな」と平和を訴えてきた本会の解散は、日本が戦後一度も戦争をせずに済んだということにもなります。その一員としての父の生きざまを書き伝えます。

三原久仁子さん（70歳）

戦傷病者として

16回の手術に耐えて

綾歌町 岩崎 森男さん

昭和15年の冬、24歳の時です。太陽が地平線から出て、地平線に入る河南省永城県付近の警備についていました。雨降りのぬかるみの農道を1日中歩きました。右足の靴下はすぐ汚れて翌日は履けないのに、左足は何日たっても汚れず、汗もかきません。水筒の湯で足を温めていましたが、良くならないので、野戦病院で診察を受けました。徐州陸軍病院に転入し、五人目の軍医の診察で初めて突発性脱疽と病名がつけられました。「この病気は歩いてはいけない」と言われ安静にしていました。

風呂上りのタオルも外にでると凍るほど寒い満州の寒さと、マラリアにかかって頭がガンガンしていても戦地に引っぱり出され、手当ても休養もできない無理がこたえたのだと思います。

2か月位、夜も昼も眠れず痛い所をじつと押さえながら、何度も死をを考えていました。「このままでは生命にかかわるから、内地で手術を受けるように」と言われ、広島、金沢、富山陸軍病院、東京日赤、東京第一、香川国立善通寺、高松中央病院と転々とし、3年半の長い闘病生活を送りました。

はじめは、左足親指に黒点が出てきたので、これを除くため昭和15年11月、爪の切開。治らないので、

血管の接ぎ替えをし、血液の循環を良くするために左足大腿部動脈手術・左腹部神経手術、翌年8月には右足大腿部動脈手術、右腹部動脈手術、右腹部神経手術をしました。

しかし、血管が収縮して血液の循環が悪くなり、骨が腐っては欠けていきました。そこで、16年11月、東京日赤病院で、遂に右足の脛切断。しかし、骨が腐るのは止まらず、18年4月には左足も下脚

切断。とうとう、両足とも鉄脚となりました。

そのため、12月に帰郷療養となり、翌年兵役免除となりました。今振り返れば……。戦前に5年程、旅順で写真屋を仕事としていたために、初年兵時代から優遇され、戦地でも大事にされました。また、中国語が話せたので、帰順兵の教育の任にあたっていたから、生き延びることができたのです。写真屋の技術もなく、中国語の通訳もできなかったら、今頃こうして生きてはいなかったでしょう。けれども、手足が不自由では本



35年間続けたパットライス業



手動三輪車に乗り西山の近くで

業の写真屋もできず、何をして生きていこうかと悩みました。「仕事はしたくない、できない」と言えば、それで通ったかもしれない。しかし、たった2年間の軍隊生活でしたが、その間に培われた軍人の精神と「帰っても絶対遊んではならん。社会のためになることをやれ」と軍医に言われたことが、常に自分を支えてくれました。最初は何をしてしても失敗ばかり、そんな時は戦死した戦友たちの事を思い、「私には命が有るのだから」と自分に言い聞かせていました。試行錯誤の後、選んだ仕事は、冬でも体が温まるパットライス業でした。昭和20年4月から、妻の協力を得て始めました。

その3年後再発し、善通寺病院で右足下脚を再切断しました。本義足になり松葉杖が無ければ歩行できなくなり、歩行できても松葉杖を握る両手指の色が変わって発熱のため、歩行困難となりました。手指は爪の下より化膿し腐骨となつて欠けていき、その痛みとしびれに加え足の切断部の痛みとの闘いの日々。



54歳の頃、国立善通寺病院で

昭和26年秋から、タバコの小売店の許可を得ることができ、店番ができるようになり、生活にハリができてきました。

翌秋、県より手動三輪車を支給され、これに乗って使い走りや商品の仕入れに走れるようになり、生活範囲が広がりました。

昭和44年、寒波に見舞われた冬、残っている手足が痛み出し、1月善通寺病院に強制入院となりました。そして、16回目の手術でした。左足の付け根から切断手術をし、左足は無くなってしまいました。無いのに足が痛む、動く、左足に悩まされ、絶対安静の回復室

にいました。死生をさまよっていた時、4度目の奇跡が起こり、3年余の入院後、48年3月に退院。それからは、リフォームした家の中で、車椅子の生活になりました。二本の足が一人前とするなら、6分の1人前、手の指は1本のみ健常。自分が生きていけるのは、いつも手足となって動いてくれる妻と、支えてくれる周りの人たちのおかげです。

今は戦後ですが、私の身体はまだ戦争が終わっていないのです。戦争さえ無ければ、こんなに手足を失うことは無かった。

絶対に戦争を起こしてはいけません。

※この聞き書きをして、父は1年半後に35年間続けた仕事をやめました。その2年後に心不全により、満65歳で不帰の人となりました。

用語の説明

野戦病院 戦場の後方に、戦傷者を収容し応急手当を施すために臨時におかれる病院。急造のテントや民家で、外科の軍医が看護兵を指揮して治療にあたる。

帰順兵 敵対するのをやめて従った兵隊
パットライス 米などに圧力をかけた後、一気に開放することでふくらんでできる菓子。



永久平和を願って

私の戦争体験談 17

次世代に戦争体験を語り継ぎたい

昭和16年の7月、父（森本登・

徳島県三好郡箸蔵村州津）は赤紙といわれた召集令状により出征しました。当時の父の年齢は38歳で、私は小学校4年生でした。わが家族の祖父、母、私、

妹二人と弟の6人を置いて征きました。当時周囲にはまだ若い男性がたくさんいたのに、なぜ高齢の父が、と悲しくなり、子どもながらにお国を恨んだことを覚えています。かつては男子が二十歳になると徴兵検査があり、父は甲種合格であったからだとなりましたが、私はすぐに納得がいかず寂しく悲しい思いで過ごしていました。

それと出発の時は、お国のために征くことから、めでたいこととして、日の丸の小旗を振り振り小学生にまで見送らせたのを覚えています。ところが、父の場合は世情不穏な折、スパイが横行しているとのことで、目立

つことはできなかったらしいのです。それで、隣の人が一ひとりそつと来てくれたの出征でした。小旗の見送りもなく、今でも思い出すと、寂しく哀れなまででした。

父はまず普通寺市の師団へ入隊しました。そして、日曜日には、兵隊が外出を許されるので、面会が叶う

かも知れないと知り、何としても会いたいと私たち母子は行つたのですが、叶いませんでした。父に喜んでもらおうと持参した好物も手渡せず、生け垣の中へ投げ入れるようにして、顔も十分に見られず、声もかけられずに別れたのです。そして、これが最後の別れとなりました。そのうちに「十二月八日」開戦となりました。その間の父の

38歳で父は出征 戦死

かの大戦で 皆逝った

郡家町 藤枝 美枝子さん

異動について、私は知るよしもありません。後に、遠く外地の満州（現在の中国東北部）へ移動させられていることをハガキで知りました。無事を告げるだけのハガキでしたが、私はすぐにいろいろな書き返信しました。果たして厳しい検閲の下、父に届いたかどうかは分かりません。父の居る満州は大変に寒いところと知りました。私たちは、年老いた祖父や、身体の弱い母

や妹と畑を耕しては、食べる物を調達するのが日課でした。

しばらく音信の途絶えた時期が続きましたが、遠く離れた南方の比島（フィリピン）からの便りが届きました。その時私は子どもながらに思ったのです。

「第一線で敵と戦って、勝ち進んだ後へ行つたのだろうか」など。

比島の父とはたびたび交信し

たことを思い出します。その中で一通のハガキに「桜咲く故郷に帰りし夢を見つ」とあります。古里を出て、苦しい中、懐かしい故郷を思い出していたのでしょうか。その一通のハガキこそは、父が戦地で活躍していた証しとして、今も私が大切に保存しております。

そんなこともあるうちに、「帰国できる日が近いかもしれない。土産まで用意しているからこの便りの返事は出さないように……」と知らせがありました。その時の私たちの喜びは大きく、ひたすら待ち望んでいただけに、夢ではないかと思われしました。その後どれほど経つた事か……。しかし、それはまったくの夢に終わりました。

戦況は逆転し、敵は新しく戦力を増強し、勝利にゆるんでいるわが軍に対して、猛攻撃を浴びせたのだと思います。私が思うに、戦況が悪くなっているのに内地でのラジオなどは、勝利しているとうそを報じていたのです。そして戦う武器を全く失っているのに、勝てるはずもないのに、国民をだまし続けたあげくに若い尊い命までも奪つ

ていたのです。

「八月十五日」天皇陛下の「玉音放送」を聞き、ついに終戦を迎えるに至ったのです。

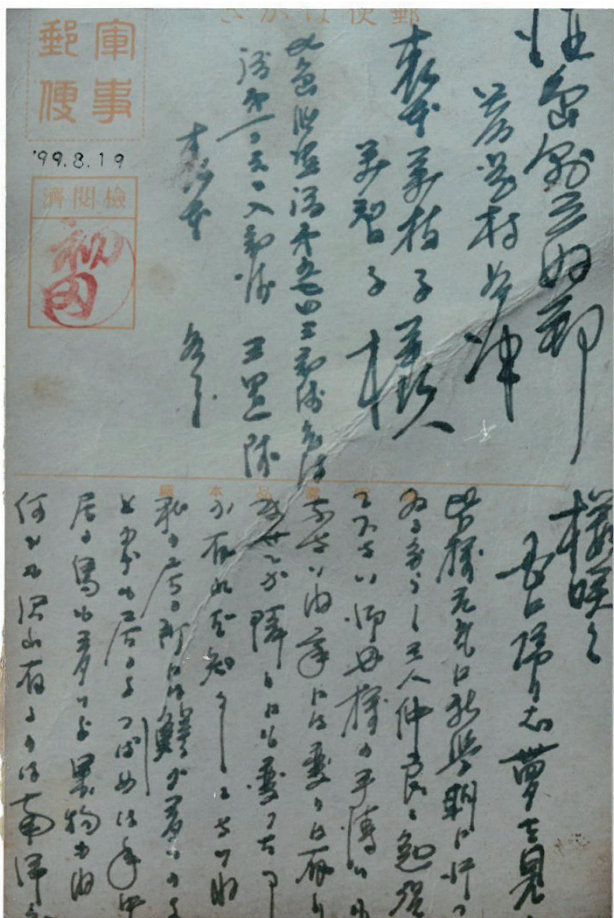
その後生きて敗戦を迎えた人たちの復員が始まりました。祖父は毎日ラジオにしがみついてそれのみを聞いていました。

「比島復員完了」の放送で、その時はじめて、私の父は帰らぬと知らされたと思います。戦死の公報には、昭和二十年七月十六日戦死とありました。41歳でした。

以上が父のことですが、父の姉と弟についてもお話したいと思っています。

伯母は、長男、次男ともに戦死。続いて叔父は神戸市から現地出征し戦死です。次の叔父は支那（中国）から現地出征し戦死です。次の叔父は海軍兵のため軍艦（名前は思い出せません）とともに、沈没。

このように私の身内は、残らず戦争の犠牲となったのですが、今では、この事実を語れるものは私ひとりとなりました。



父から届いた一通のハガキ



永久平和を願って 次世代に戦争体験を語り継ぎたい

私の戦争体験談 18

私の夫順一は、5人兄弟の長男で、海軍の特攻「蛟龍」の搭乗員でした。出撃の前日に終戦を迎え、戦争体験記を書いていました。その手記を基に、夫の弟の寛が、表題のような本を出版して、戦争の惨劇と平和の尊さを人々に訴えています。このたび、本紙のこのシリーズを知り、また、市の広報担当の人からのお話もあり、横井寛の快諾を得て掲載させていただきますことになりました。

五分間の決断

昭和19年8月27日、夕暮れどき



横井順一（17歳）

のことである。滋賀海軍航空隊の練兵場に、予科練甲飛十三期生の全員が集められた。重大な話があるとのこととで周りの人払いをして、上級幹部だけが残った。海軍少将森本承司令がゆっくり

五分間の決断

「特殊潜航艇『蛟龍612号艇』横井順一の手記」

（平成23年㈱美巧社発行）

横井寛編から抜粋

作原町 横井 康代

号令台に立った。普段とは少し違う。無言のまま私たちを見渡し両手で手招きして、

「皆もつと近くへ寄つて来い」

司令の目には、涙がこぼれ落ちそうである。へこれは大変なことが起きそうだ」と感じた。しばらく黙っていた司令が思いつめた表情で口を開いた。

「今や敵の反撃は激しさを増し、

戦局は急激に緊迫、祖国はまさに危機にさらされている。今までのような戦法ではとうてい立ち向かえない。そこで、このたび我が海軍においては、画期的な〇（マル）兵器を開発した」

司令は話の途中で黙った。私たちをじーっと見回してから、言葉が続けた。

「一撃必殺の兵器で、極めて危険が伴う。この要員には、攻撃精神旺盛な諸君のような若者が必要である。2、3か月の訓練を受けた

後、ただちに実

戦に参加する」

副長が司令に

代わって号令台

に立った。

「熱望者は二重

丸、命令どおり

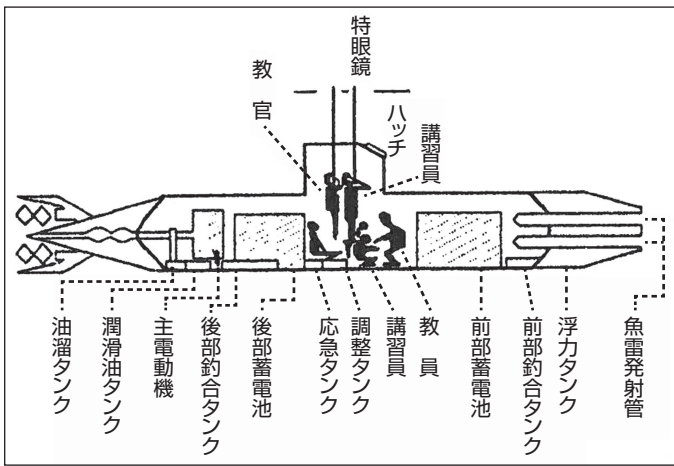
にする者二重丸

希望しない者は何も書かずに提出せよ。考える時間は五分間、良く考えて決断すること。私語もよそ見も禁止する」

小さな白紙が配られてきた。背筋に冷水が流れる感じがして、白紙を受け取る手が震えた。

へどうしよう。応募すれば、2、3か月の命である」5分間で決めなければならぬ。17歳の私たち

強く二重丸を書く。
選考の結果、選ばれた者は全体の一割でちょうど百人。私の名前も入っていた。
数か月を待たずに戦地に行くため、遺骨の代わりに髪と爪を切つて両親に送った。

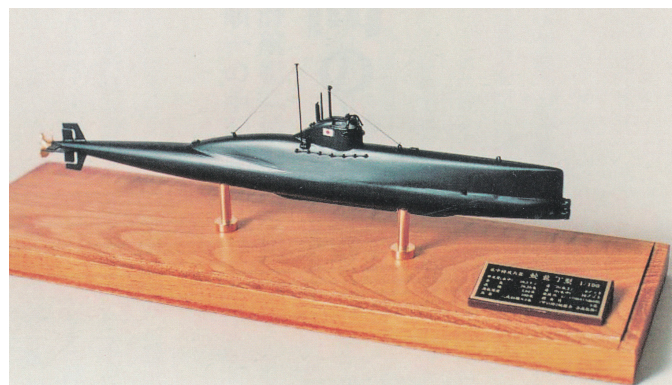


訓練艇の略図

帰郷
昭和20年8月23日に、小豆島基地から艇を広島県の倉橋島にある特殊潜航艇の基地に回航して任務は終了した。
運良く徴用した船便を利用して愛媛県の三津浜に渡った。国鉄松山駅から上り列車に乗り携帯用工

丸亀駅のホームに降り立った。早く帰りたいと心は弾むが、仲間間の死を思うと、戦に負けた生き残りが大手を振って帰れない。人目を避けて裏道を急ぐ。
わが家に近づいた時、Aじいさんに出会った。
「予科練に行つて無事に帰れてよかったな。Tの息子は沖縄で戦死したよ。あんたと一緒に入隊したO君も戦死した。後から行ったK君は訓練中に殉職したそうな」
身近な予科練の仲間が三人も死亡していたことに、胸を締め付けられる思いがする。なかでも前年の夏、一週間の休暇をいただいて

帰ったとき、私の七つボタンの二種軍装（白い夏服）姿を見た年下のK君が、予科練に懂れて若い命を失つていた。休暇の時の出会いがなければ死ななかつたのかもしれないと悔やまれてならない。
「飛行機乗り！よう生きて帰つたのう」
「私は飛行機から、特殊潜航艇に乗っていた」
「真珠湾に行った二人乗りか？」
「その艇を改良した五人乗りの蛟龍だ」
「そうだったんか。そこで、内緒の話じゃが、あんたの艇をどこぞに隠しといたんか？」
元気なAじいさんは、戦争に負けたが間もなく再起すると思つていふらしい。艇は呉に集結させて武装解除する。搭乗員は直ちに帰されたと話して納得してくれた。
「あんた海軍で鍛えた腕で、いろんなことを皆に教えてくれ、頼むぞ！早う帰つて親に元気な顔を見せるんだ」Aじいさんは私の肩を軽くたたいた。
神棚と仏壇に手を合わせ無事に帰れたことを報告し、家族で喜び合うのも家の内だけである。隣や裏の家には世帯主が戦地に行ったままで安否が気づかわれており、



特殊潜航艇『蛟龍』の模型

近くに戦死者の出た家も数軒ある。村の中で早く帰れた私はなんだか肩身の狭い思いがした。
蟬の声に誘われて裏庭に出た。木漏れ日の井戸端で汗を流した。
平成21年12月5日、夫順一の葬儀が行われました。その棺には軍艦旗がかけられ、『海ゆかば』の曲が静かに流れていました。

（本紙掲載にあたり、編者の許可を得て、修正、割愛などをしていきます。また、この本は中央図書館に寄贈されています。）

の命が、たった一つの符号の選択で決まることになる。
横目で他の人を盗み見た。弟がいる右隣のMは、感激したらしくすぐに記入してしまった。左側の一人息子のTは、鉛筆を握りしめて目を閉じ、うつむいたまま考え込んでいる。この〇兵器は、水上を走るか水中を潜るか全く分からないが、生きては帰れない体当たり兵器だと思った。
白紙を見つめたまま迷っている、父母の顔、弟たちや妹の顔も浮かんでくる。だが、誰も黙ったままでも何も言ってくれない。
叔母の顔も浮かぶ。9か月前に入隊することを知らせたとき、
「なんで志願したの。死に急ぐことないやろ。今から止められないの」
戦争で夫を亡くした叔母が寂しそうに言つたのを思い出す。鼓動が高鳴り刻々と時が経っていく。
へもう時間が無いへ

水に溺れかけた弟（三男の實）を飛び込んで助けたときのことが目には浮かんできた。へ家族や周りの人たちを守るためには、やっぱり自分が捨てるようになるべきではないか。〇兵器に乗るんだへやっと決断することができ、震える手で力



永久平和を願って

私の戦争体験談 19

次世代に戦争体験を語り継ぎたい

●高松空襲

当時、私は13歳の少年でした。早くに母を病気で亡くし、兄は軍に入隊して関東へ。父は住み込みで働いていたため、実家は高松市の塩上町にありましたが、離れ離れに暮らしていました。

そして、昭和20年7月4日未明に起きたのが高松空襲です。

その時、私は同じ市内の浜ノ町に住む叔母の家に身を寄せていました。深夜、空襲警報のサイレンが鳴り響き、叔母の家にあった防空壕に二人で逃げ込んでいまし

た。今日も空襲はなかったと安堵していたそのときでした。ドカン

という爆音が耳をつんざき、地面からは体を突き上げるような衝撃が伝わってきました。防空壕から顔を出し、東の空を見ると火柱

が上がっていました。アメリカ

の爆撃機B29が焼夷弾を落としたのです。容赦

ない爆撃は続き、高松は火の海と化し、辺りを

切なる願いは

戦争のない平和な世界

土器町 菊地 数雄さん



菊地数雄さん(当時9歳)

明るく照らしました。

後に公表された報告書によると、B29爆撃機116機による空襲は午前2時56分から106分間続き、市街地の約80%が被害を受け、死者1359人、負傷者1034人、行方不明者186人など、数字からも相当な被害だったことが分かります。

夜が明け、辺りを見渡すと市街地は焼け野原。残っていたのは警察署や三越、高松駅など建物数棟

のみ。私は見たこともない光景にがく然としました。

息つく暇もなく今度はグラマン戦闘機が飛んできました。グラマンは、日本の零戦と空中戦を演じたアメリカ海軍の主力戦闘機です。そのグラマンは低空飛行から動くもの目掛けて機銃掃射。逃げ惑う人々を執拗に追い掛け回しましたが、帰るところを失った私たちは、警

察署で一人にひとつ配られていた玄米のおむすびを手に、祖父母を頼って志度に向かうことにしました。

途中立ち寄った栗林公園の池には皮膚が焼けただれた死体がたくさん浮いていました。爆撃を受け、その熱さから水を求め飛び込んだ池は、焼夷弾の熱で熱湯になっていたのです。その有り様は、あの穏やかで優美な佇まいの栗林公園からは想像もつかないような地獄絵図でした。軍は池に浮かんだ死体を次から次にトラックに乗せ、当時火葬場のあった沖松島まで運んでいきました。その数がありにも多いため、荷台には折り重なった死体が山積み状態。また、道にはまだ煙が上がる黒焦げの棒のようになった死体がたくさん横たわっていました。それらを尻目に、私は無我夢中で志度を目指しました。

●志度での思い出

高松空襲の2日後、7月6日に再びグラマンが現れました。

志度の大串半島の西沖に停泊していた空母目掛けて機銃掃射を浴びせました。結局空母は沈没し、近くの集落も銃撃の被害に遭いま

した。

志度に居たころ、私は小田の国民学校に通っていましたが、最初はよそ者扱いされ、しばらくは辛い学校生活でした。その中でも印象に残っている出来事が2つあります。

1つは、同級生が海岸に捨てられていた機雷から信管を抜いて、学校に持ち帰ってきたことです。子どもだったので、深く考えず、遊びのつもりでした。信管を机に打ちつけた瞬間、信管は爆発。その同級生は手首から先が吹き飛んでしまいました。そばで見ていたほかの同級生も大けが。私自身も飛んできた破片だけがを負いました。

もう1つは特攻服を着た死体が流れ着いたことです。漁師さんはその死体を船に乗せ、陸まで運んできました。上陸させた後は子どもたちも手伝い、学校の講堂まで運び入れました。軍服の名札や階級章から鈴木少尉ということが分かりました。お坊さんがお経を読む横で手を合わせました。

長い間水に漬かっていたため、肌はブヨブヨで、腹はパンパンに膨らみ、真夏のため腐敗が進み、すごい臭いを放っていたのを今でも

忘れられません。

●今思うこと

昭和20年8月15日、天皇陛下が終戦を告げる玉音放送があったとき、近くでは戦闘機がまだ銃撃戦を繰り返していたものですから、終戦を迎えたという知らせにピンときませんでした。

その後、15歳で県外の造船所の船大工として弟子入りし、九州の造船所を転々とした後、35歳のときに香川に戻ってきました。家族にも恵まれ、今は幸せに暮らしています。

終戦から約75年、私のまわりで戦争を体験している人も段々と少なくなってきました。本当に戦争はするものではない。私が体験したことを、今の世代の人に知ってもらいたいと思い、お話をしました。





永久平和を願って

私の戦争体験談 20

次世代に戦争体験を語り継ぎたい

どもも大人に混じって松ヤニを採り、鉄くずなどの金属を集めた。

日本内地での唯一の戦闘と慰問袋で送った絵

私は昭和14年2月11日、旧紀元節に広島県で生まれた。紀元節とは今の建国記念日である。幼児期を戦争の真ただ中で過ごし、昭和20年に国民学校（初等科6年、高等科2年）へ入学したが、その年の8月に終戦を迎えた。

私の故郷が、

計62回の空襲を受けた海軍鎮守府「呉」に近かったこともあり、そのたびに米艦載戦闘機は登校中の私たち目掛けて機銃掃射した。戦時中は物資不足から、子



母と6歳の昭紀さん

6歳だった幼児の戦争体験と伝えたいこと

土器町 實近 昭紀さん

前線の兵士を勇気づけるため、手紙や絵を慰問袋に入れて戦地に送ったりもした。また、食糧不足も著しく、国民学校の運動場は一面芋畑で、私たちはその世話をしていた。

私の父は陸軍の召集命令に応じるまで、広島市が本社の藝陽自動車にハイヤーやバスの運転手として勤務して

いた。父が「呉」近くに勤務していたとき、私と母は、国鉄呉線で「呉」によ

く行っていた。「呉」に近づく、汽車の木製鎧戸を閉めるよう命令された。当時、呉海軍工廠では戦艦大和を建造中で、工廠は高い遮蔽壁で隠されていた。

2016年11月、劇場公開していたアニメ映画「この世界の片隅に 昭和20年、広島・呉」は、私の体験とぴったり重なって懐かしかった。戦艦「伊勢」は弾を打ち尽くし、米軍機の猛爆撃で大破着

底した。沈没前、主砲内に残存していた二発の砲弾を処理するため、仰角一杯に上げた主砲からの発射が、くしくも日本海軍連合艦隊最後の主砲発射となった。この戦闘は、係留のため米軍機の爆撃を航送回避できない中で、洋上戦と同じ戦闘が行われた日本内地唯一の戦闘だった。

戦争が終わり、激戦のフィリピン戦線から復員した兵士が、母に「昭紀さん（私）が描いた慰問袋の絵が、市外戦を制して占領したマニラの街角に貼られていて涙が出た」と話した。遠い異国フィリピンの激戦地マニラの街角に貼られた私の絵が戦いに疲弊した兵士の慰めになったことを思い出す。

父が部隊行軍で偶然すれ違った末弟との永遠の別れ

父は広島師団で、戦線への編成を受けた。父の一人前までは南方派遣で、父は北支派遣だった。後に戦況悪化で、南方派遣軍は玉砕（全滅）が続き、生死も紙一重だったと復員した父は語っていた。戦線派遣前、母と曾祖父母と



昭紀さんの父(昭和20年1月撮影)

墓」がテレビでよく放映される。重巡洋艦「摩耶」の海軍士官だった父を海戦で失い、母を神戸の空襲で亡くし、戦線孤児に

私は、一度だけ許された面会のため、広島師団にいる父の元を訪れた。食料など持ち込み禁止だったが、幼い私なら部隊の衛兵も大目に見てくれるだろうと、上着のポケット一杯にみかんを詰め込んで面会した。営門の衛兵は見逃してくれた。また、軍事機密のため編成地から外部への手紙は厳禁だったが、いよいよ戦地へ出発というとき、堀の外の道路を往來する人へ家族あての手紙を隠れて託すことが行われていた。父も戦地へ発つ日、鉄条網の間から偶然道路を通りかかった夫人に手紙を託したが、慌てていたため切手代わりの金を忘れていた。それにも関

戦争は足るを知らない人類最大の悪

わらず、夫人は快く引き受けてくれたという。戦地から復員した父が、「あの夫人も原爆で亡くなっただろう」としみじみ語った。北支の荒野を父の部隊が行軍中、南下部隊とすれ違った。このとき偶然にも南下部隊に末弟を見つけたが、声を掛ける間もなく両部隊は行き過ぎたという。末弟の部隊は、南方戦線部隊壊滅による補充のための南下であったため、弟も南方で戦死し遺骨はない。

8月15日の終戦日が近づくと、野坂昭如氏原作のアニメ「火垂るの

なった幼い兄と妹が短い一生を終える映画である。神戸の国鉄三ノ宮駅構内で野垂れ死にした兄・清太を駅の係員が片付けるシーン。死体確認の係員が、清太の懐から転がったドロップスの缶を草むらへ放り投げると、カラコンロンと転がり蓋が開いて骨片が散らばる。この骨は栄養失調で死んだ妹・節子をだびに付した骨だが、このシーンは何度見ても切ない。対戦国それぞれに開戦する理由があるのだろうか……。

ある野生動物写真家が偶然撮影した感動的なシーンを披露して結びとしたい。アフリカのサバンナでスコールにあつてズブ濡れになったインパラの子が、雨を避けてライオンのいる岩陰に入った。飛んで火にいる夏の虫。ところが満腹だったライオンは、子インパラの濡れた全身をなめて乾かしてやった。なぜ人間は足るを知らないのだろうか。人類の歴史は戦争の歴史という。戦争は足るを知らない人類が起こす最大の悪である。戦争を起こしてはならない。私はこのことを伝えたい。

用語の説明

- ◆鎮守府 日本海軍の根拠地として艦隊の後方を統括した機関
- ◆慰問袋 出征軍人などの慰問のために手紙・日用品・娯楽品などを入れた袋
- ◆工廠 旧陸海軍に所属し、兵器・弾薬などの軍需品を製造・修理した工場
- ◆重巡洋艦 強力な攻撃力と高速性能を持つ巡洋艦の中でも大型のもの
- ◆北支 中国北部



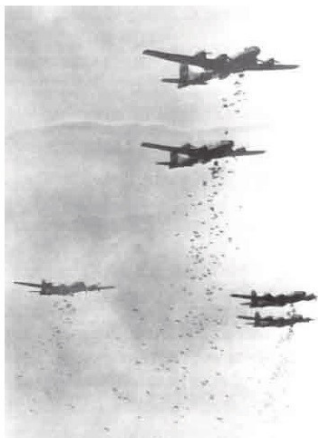
永久平和を願って 次世代に戦争体験を語り継ぎたい

私の戦争体験談 ①

広聴広報課
☎24-8801

昭和16年12月8日、日本は真珠湾攻撃に続き、米英に宣戦布告。ついに戦争に突入しました。

陸軍は開戦から50日くらいで、東南アジアのマレー半島を南下進撃。そのままシンガポールを攻め落としました。当時、郡家国民学校初等科の3年生だった私たちは、日本の勝利に日の丸の小旗を振って「万歳万歳」の大合唱。そ



B-29爆撃機による爆弾投下の様子。日本各地でB-29による爆撃が行われ、高松空襲もその一つ。

の後、勢いづく日本軍は、さらに北へ南へと各方面に進撃しました。時は経ち、開戦から約1年半後

大東亜戦争（太平洋戦争）と

国民学校の生徒

郡家町 草薨 正美さん

の昭和18年5月29日、校長先生は朝礼で、北アメリカのアッツ島で日本軍2千6百人が玉砕したことを私たちに告げました。日本初

の玉砕です。それまで快進撃を続けていただけに、本当に驚きました。また、南半球のソロモン海でも戦闘していると聞かされたときは、戦争が激化していると子どもながらに感じとりました。

その頃になると、国内では食糧不足で物資も次第になくなり、学校の教科書も上級生のお下がり。通学には下駄やわら草履が当たり前でした。

都会では、

子どもは危

ないから

と、親元を

離れて田舎

へ疎開。私

の組にも4、5人が来ていました。が、近くの与北村のお寺には、集団疎開で20、30人くらいの子どもが来ていたそうです。

戦争は、教育にも影響を及ぼします。学校では毎朝、東の宮城（皇居）に向かって最敬礼。帰る前には「海行かば」の歌を唄い、「国のために奉公、大君（天皇）に忠義」と教育されていたのです。5年生

のとき、担任の先生が来ないので欠勤かと思っていたら、「召集令状で軍隊に入隊です」と伝えられました。先生は最初から、下士官での入隊です。私たちはそれを誇りに思いました。「お国のために命をささげることが美德」という考えが当たり前だったのです。

戦争は日増しに激しくなり、昭和19年7月にはグアム島とサイパン島、その後も日本軍は次々と玉砕。本土では空襲が始まりました。それでも日本は神の国だから、戦争で負けるはずがないと信じていました。ラジオのニュースでも勇ましく軍艦マーチが流れ、大本営発表で、敵航空母艦2隻撃沈、敵戦艦3隻撃沈といった勝利の知らせが流れるたびに、大人と子どもが一緒になって、「ヤッタ、ヤッタ」と歓喜の声を上げていました。

しかし、昭和20年に入ると、3月の東京大空襲に始まり、大阪やそのほかの大都市が敵のB29爆撃機によって、次々焼かれていきました。

い早朝の出来事でした。私のいるところから30キロも離れた東の空が、夕焼けのように真っ赤に染まりました。遠くからでも激しく燃えているのが分かるほどでした。高松空襲です。

私自身も怖い思いをしました。外にいたときの事です。急に敵機グラマン戦闘機が急降下。低空飛行で、私の頭上をかすめるように飛び去りました。撃たれて死ぬのかという恐ろしさで、全身を震わせながら必死で伏せていたことを今でも忘れられません。

そして、昭和20年8月、広島

長崎へあの恐ろしい原爆が投下され、ほどなく日本が無条件降伏して終戦となりました。終戦の日から数えて、今年で75年。今の子どもたちに、私たちのような思いをさせたくありません。二度と戦争のない、平和な時代が続きますよう祈りたいと思います。

用語の説明

- ◆**大本営発表**：大本営（戦時の天皇直属の最高統帥機関）が発表する戦況の情報。戦争末期には、戦況が悪化しているにも関わらず、優勢との情報を流していた。
- ◆**海行かば**：当時の大日本帝国政府が国民精神総動員（国家のため自己犠牲で尽くす精神を推進した運動）強調週間を制定した際のテーマ曲。